

南支那紀行

未完

ル 5
3565



明治十二年三月十四日進解清国沿海回航
 多本部ヨリ日防カ長人 是ニ譯官ナ一サキ出仕国司政輔
 ヲ流ニ同国海峽ニ巡視セシラレ依ラ同月十五日東京
 ヲ至五十五年六月二十日帰朝ス然レモ主京ヨリ浅学ニシテ
 前年萬方一調査リ遂ニ能ク其地ヲ聊 其経歴ニモ
 此地方ニ訪ラ見テ字ニ訛ヲ左ニ完載上申仕也
 明治十二年

陸軍少将 山内長人
 陸軍少将 佐藤山内少将

参謀本部長官 野田 毅

明治十二年三月十五日晴正午四十九度午前八
 時 飛京横濱ニ到ル日 進艦長ハ笠間海軍少佐副
 長ハ石田海軍少佐ナリ又該艦士官ノ姓名左ノ



- | | |
|---------|-----------|
| 大 軍 醫 | 鍋 木 融 |
| 大 機 関 士 | 山 根 信 道 |
| 海 軍 中 尉 | 馬 屋 原 孝 範 |
| 同 | 飯 田 直 幸 |
| 中 主 計 | 中 村 基 俊 |
| 海 軍 少 尉 | 児 玉 利 純 |

十九日晴正午四十七度兵庫港滞在

二十日晴正午四十五度午後九時十分兵庫港拔

錨

廿一日雹ヲ雨ラス正午五十一度風潮ノ悪キヲ

以テ午前九時五分讚州小豆島ノ内石場村ノ沖

ニ投錨ス

廿二日晴正午五十度午前四時二十五分小豆嶋

拔錨

廿三日雷雪ヲ雨ラス正午五十度午前八時豊前

国門司浦へ投錨ス之レ風潮悪シキヲ以テナリ

廿四日晴正午五十九度午前十時十七分門司浦

拔錨

廿五日晴正午五十九度午前八時三十分長崎港

投錨

廿六日晴正午六十度長崎滞在

廿七日晴正午六十度長崎滞在

廿八日晴正午五十九度長崎滞在

廿九日雨正午六十六度長崎滞在

三十日晴正午六十四度長崎滞在

三十一日晴正午六十四度長崎滞在東京参謀本

部へ第一号報告書ヲ發進ス
四月一日晴正午六十七度長寄滞在
二日雷雨正午六十八度長寄滞在明三日午前十
壹時乘艦同午後一時發艦ニ決定ス
三日雨正午六十一度長寄滞在本日ハ午後一時
拔錨ニ豫定シアリシガ昨二日午後十二時風雨
針二九、五三本日午前四時二九、四五ニ至ルヲ以
テ本日ハ出艦セズ明四日午前第九時拔錨ノ旨
艦長笠間少佐ヨリ報知アリ
四日晴正午五十七度午前八時乘艦同十時五十

五分長崎拔錨清輝艦ヨリ水兵ヲ右舷ノ繩梯ニ
上ケ我艦ノ航行ヲ賀ス之レニ次テ佛國軍艦モ
亦樂ヲ奏シ水兵凡ソ一分隊許ヲ艙ノ甲板上ニ
整列セシメ棒銃ノ禮ヲ為ス我艦モ亦夕之レニ
答禮ス
五日晴正午六十七度半航海中
六日雨正午六十三度航海中
七日晴正午六十六度航海中霧甚シク咫尺ヲ辨
セズ故ニ五分毎ニ數回ノ蒸氣笛ヲ鳴ス之レ衝
突ヲ豫防セシガ為ナリ

八日晴正午六十二度航海中午後一時三十分清
國オツクシウ島燈臺ヲ過ク

九日晴午前第九時四十五分清國廈門港へ投錨
ス港口ニ燈台アリ陸上ニ在ル号旗檣ヨリ我艦
ノ入港ヲ号旗ヲ以テ同港ノ港長ニ通報ス故ニ
港長ハ直ニ屬吏ヲ我艦ニ派シ碇泊スヘキ位置
及ヒ其進路ヲ指示シ米國軍艦ノ前方ニ投錨ス
米國軍艦ノ士官直ニ來テ我艦ノ安着ヲ賀ス次
テ我領事福島九成モ來艦ス艦長并ニ鼎介之レ
ニ接ス午後二時艦長及鼎介長人等鼓浪嶼ニ上

陸我領事館ニ至ル該島ハ周圍僅ニ二英里強ニ
シテ外國人ノ專ラ居留スル所タリ然レトモ支
那人モ亦數十戸街衢ヲナセリ長人ハ海軍士官
等ト共ニ領事館ノ書記生富山清明山田謙徳等
ヲ教導トシ該島中ヲ巡視セシカ島中ノ最モ高
所ニ大ナル天然石アリテ之レニ鷺江第一ト彫
刻セリ之レ此ノ灣恰カモ鷺嘴ニ似タルヲ以テ
支那人ハ之レヲ鷺江ト稱スルニ據ルナルヘシ
島中ニ數個ノ井泉アリ共ニ飲料ニ供スルヲ得
ヘシ之レニ及ヒ厦門島ハ飲料ニ供スヘキ井泉

甚ハ夕爰シト云フ又夕島中ニ僅カノ水田アリ
農夫ノ耕耘スルハ全ク我國ト相異ナルナク牛
ヲ使用シテ耕セリ畑モ僅カニアリ大豆ヲ植ヘ
タリ既ニ其生殖スル四五寸許リニ及ヘリ西洋
人及ヒ土人ノ墳墓アリ土人ノ墳墓ハ横臥シテ
埋葬シ其上ヲ石灰ヲ以テ塗リ前面ニ石片ヲ建
ツ之レヲ祭ルニハ四五寸許ノ紙片ヲ數多其墳
墓上ニ竹串ヲ以テ地上ニ附着セリ此帛ヲ紙錢
ト名ヅク紙錢ヲ祭典ニ用フルハ清國南方ノ風
俗ナルヘシ

十日正午五十三度午前微雨午後曇終日強風止
マズ厦門滞在
十一日午前微雨午後曇鼎介等當地留學生長崎
縣士族山口五郎太ノ教導ニ依リテ厦門へ上陸
ス當港ハ北緯二十四度四十分東經百十八度ニ
シテ福建省泉州府ノ所轄同安縣ニ屬ス往昔ヨ
リ西洋人ト貿易ヲ開キシ埠頭ナリシガ其後一
千八百四十年英國水師此港ヲ攻略シ次テ南京
條約ニ因テ貿易場ノ一港タルヲ公認セリ城郭
アリ周ラスニ牆壁ヲ以テス高サ一丈許リ城門

四アリ必ス若干ノ番兵ヲ配布ス此地ハ花剛石
ヲ産出シ又煉尾石ヲ作ル共ニ其質善良ナリ故
ニ家屋ハ勿論市街敷石ト雖モ亦之レヲ用フ然
レドモ其市街ノ不潔ナルハ聞レニ優レルコト
多々之ヲ畧記スルニ大街路ト雖モ街幅僅カニ
六尺ニ滿タス軒端ノ如キハ殆ント相接シ白晝
ト雖モ恰モ黄昏ノ如キ臭気鼻ヲ穿チ為メニ頭
痛ヲ生セントス豚ハ街路ハ勿論家屋ノ周圍ヲ
道達シ兒童ノ之レト戯ムレ遊フ者アリ又便所
ハ街路ニ於テハ小路ノ一隅ニ屋内ニ在テハ多

クハ室内ニ高サ二尺或ハ一尺二三寸許ノ小壺
ヲ置キテ之レニ尿ス其ノ街衢ノ如キハ尿壺間
々轉倒モ或ハ缺損シ四周ニ流散シ遠ク低キニ
流ル然レトモ支那人ハ毫モ不潔ト想フノ意ナ
ク其行商ノ如キハ荷ヲ尿上ニ卸シ食物ヲ賣リ
又之レヲ食フ者アリ實ニ見ルニ忍ビサルナリ
其不潔ナル榮畧斯ノ如キ此市街ヲ右轉左折シ
山口五郎太ノ知人タル清國陸軍武官當時非職
ナル張紹祖續候(我陸軍少佐ニ相當ス)ノ寓ニ至
ル之レ兵事ヲ探偵センカ為メナリ其門扉ニハ

二名ノ人物ヲ彩色ス之レ官廳ノ証ニシテ清國
風ニテ九品以上ノ者ハ必ス一ノ官廳ヲ有ス
我國ノ官宅ニ似タリ門ヲ入レハ一室アリ之レ
即正室ニシテ他人ノ望見ヲ遮蔽スル為メ簾ヲ
垂レリ案内ヲ通セントスルトキ同氏ハ室中ヲ
出テ山口五郎太ノ來ルヲ見テ之レト談話ニ俱
ニ室内ニ入り我國ノ磁器ヲ用ヒ茶ヲ喫セシム
爰ニ於テ鼎介長人等ハ山口五郎太ノ朋友ニシ
テ今般清國ニ漫遊セシ者ナルヲ以テ爾來親シ
ク相交ハラシコトヲ乞フ張氏之レヲ諾ス此日

ハ兵事ノ談ニ及ハス暫時ニシテ同家ヲ去リ當
地ニ於テ金穴ノ稱アル黃振瑞ノ別莊ニ至ル該
家ハ通常ノ市街ニ在ル家屋トハ大ニ遠ヒ稍々
清潔ナリト雖モ支那人ノ風トシテ日ニ洒掃セ
サルヲ以テ不潔ナルヲ免カレス然レトモ金力
ヲ盡クシテ構造セシモノト見ヘ室數モ多ク庭
石樹木及ヒ書画文房器具等大ニ意ヲ用井タル
モノハ如シ韋ヒ同家ニ漳州ノ道台寄泊セルヲ
以テ庭中ノ山上ニ於テ會話セリ鼎介ハ醫師本
草家ト稱シ名刺ヲ通シ他日漫遊ノトキハ又相

尋ヌヘキヲ約ス之レ漳州ヲ一見センカ為メナ
談道台ハ陳鴻翔仲鸞ト云フ談話喫茶等終テ
談家ヲ去ル市街ニハ菀豆茄子黃瓜等ヲ店前ニ
布置セリ以テ其氣候ノ我國ト異ナルヲ知ルハ
シ午後山口五郎太ト共ニ南普陀ニ至ル此ノ寺
院ハ市街ノ後方ニ在ル小山ヲ起ヘ少シク下リ
タル処ニアリ寺中ニ清國文字ト滿州字ヲ以テ
記セル碑アリ之レハ昔時鄭成功ノ子孫台灣島
ニ據リ清國ニ抗抵セシヲ討滅シタル記念碑ナ
リト云フ此寺ノ前面ニ操兵場アリ甚々狭小ノ

モノナリ寺僧ニ茶ヲ乞ヒ少ク休憩セシ後チ又
旧ノ道途ニ帰り再々市街南西ノ方ニ至リ市街
ヲ離ル、四五町許リニシテ一ノ寺院アリ之ヲ
寺林寺ト云フ其背後ノ石山ヲ白鹿洞ト云フ山
上ニ登ルニ奇礫怪石疊重シ恰モ仙境ニ入ルノ
思ヒヲナス所謂ル是レ朱子ノ宅址ナリト今ニ
柱石ト四壁ノ一部ヲ存ス其柱ハ悉ク花剗石ヲ
以テ作り壁ハ煉瓦ヲ墨層セシモノナリ今ヲ去
ル數百年前ニ於テ斯ノ如ク煉瓦ノ發明アル當
時支那ノ文學六藝ノ盛大ナル追想スルヲ得ヘ

漸ク登リ又下リテ巨石ノ相合スル洞中ニ入
此大石ニ六合天ト記セリ蓋シ巨石六個相合
シテ一ノ洞ヲナスニ依ルナルヘシ又登リテ終
ニ上頂ニ至リ再ヒ下リテ半バニ至ルニ二十間
モアルヘキ巨石二個相重リテ其間ニ十尺許ノ
空隙ヲ港口ノ方ニ面シテ存セリ故ニ眺望殊ニ
妙ナリ此上層ノ巨石ニ劃熊長嘯ノ四大字ヲ剛
刺セリ恰モ老帛ノ長ク嘯ク状ニ類セリ夫レヨ
リ左折シテ下リ又右折シテ下レハ一ノ寺院ア
リ即チ寺林寺ナリ建築ハ我寺院ト大同小異ナ

リ茶ヲ乞ヒ終テ又下レハ一ノ石槁アリ之レヲ
渡レハ其前面ニ一大石アリ漸入佳境ノ四大字
ヲ彫刺ス東坡ノ書ナリト云フ終ニ市街ニ歸リ
税館ニ至リ官吏張青選坪軒ニ面會ス之レ此地
ノ風俗ヲ詳委センカ為メナリ
十二日微雨再ヒ展門ニ上陸シ市街ヲ道遙ス午
後七時領事ヨリ日進艦士官半数及ヒ鼎介長人
ヲ招待ス
十三日曇正午六十二度午後七時領事ヨリ日進
艦士官半数及ヒ譯官國司政輔等ヲ招待ス艦中

一覽ノ為メ清國税関ノ官吏來艦ニ黄以徳ナル
者之レニ從行セリ此日東京參謀本部へ第二号
報告ヲ發進ス

十四日晴正午六十七度午後第一時三十分笠間
日進艦長福島領事ト共ニ厦門道台司徒緒氏ヲ
問フ海軍士官モ多ク同行ヲ望ム者アリト雖モ
同行ノ多人教ナルト鼎介長人等モ陸軍武官ト
稱スルトキハ大ニ疑惑ヲ生セシムルヲ以テ鼎
介ハ醫ト稱シ長人ハ從僕ト稱シ領事ノ從僕ト
合計僅カニ五名ノミ同行スヘキコトニ決定ス

午後一時福島領事來艦端船ヲ以テ厦門ニ上陸
ス陸上ニハ豫メ領事ヨリ三挺ノ輪ヲ備ヘシム
故ニ艦長領事鼎介等ハ之レニ乘リ長人ハ從僕
ト稱セシヲ以テ領事ノ從僕清國人某ト共ニ步行
シ市街ヲ經テ城内ニ入り終ニ道台ノ官舎ニ至
ル正門ニ入ラントスルトキ祝砲三發ヲ放ス其
砲タルヤ實ニ笑フヘキモノニシテ四五寸許ノ
圓筒ニ火藥ヲ裝填シ之レヲ地上ニ置キ火ヲ点
ス之レ來賓ヲ祝スル為メナリ凡ソ祝事ニ紙炮
ヲ放ツハ清國一般ノ慣習ナリト云フ門内ニ入

レハ正廳アリ之レニ種々ノ扁額對聯等ヲ懸ク
其正面ノ扁額ニハ戎行戴德、民瘼周知、惟明克允、
放簡書等ノ文字ヲ書ス艦長領事及ヒ鼎介等ハ
道台ニ導カレ左折シテ客室ニ至ル茶菓ヲ饗セ
リ談兵事ニ涉レハ言ヲ左右ニシ敢テ答ヘス且
醫ト稱セシヲ以テ談話中專ラ兵事ニ及フトキ
ハ大ニ疑惑ヲ生セシムルヲ以テ漳州府へ漫遊
スヘキコトヲ請求セシニ道台之レニ答テ曰ク
談地モ敢テ見ルヘキモノナシト雖モ果シテ談
地ニ至ルヘキナレハ吏負ヲシテ從行セシムヘ

シト又長人ハ領事ノ從者清國人某ト共ニ卑官
等ノ屋舎ニ至リ喫煙及ヒ喫茶ス此間務メテ兵
事ニ関スル事項ヲ探究セント欲スレトモ言語
ノ通セサルヲ以テ其近傍ヲ左顧右省スレトモ
亦絶ヘテ記スヘキモノナシ只左廊ノ後方ニ在
ル客室ニ相對スル所ニ一ノ美麗ナル閩羽廟ノ
如キモノアリ其前面石壘ノ上ニテ兒女ノ戯レ
遊フアリ長人往テ親シク一見セント欲シ歩ヲ
移シテ之レヲ離ル、二三十歩ノ所ニ至レハ省
守ノ清國人來テ行クヘカラスト手樣ヲ以テ之

ヲ示ス故ニ長人モ強テ往カス旧ノ休息所ニ歸
リ想フニ誣児等ハ道台及ヒ次官等ノ子女ナ
ルヘシ其衣服ノ如キモ是迄市街ニ見ル所ノ者
ニ比スレハ大ニ優レリ其兒女ハ七八歳ニシテ
髪ヲ美麗ニ梳ヅリ紅粉ヲ装ヘリ又男子ハ十三
四歳ト十二三ノ者ニ名ナリキ暫ク休憩所ニ入
リテ喫煙スルトキ稍々上等官吏年紀四十位ノ
清國人一名來リテ長人ニ尤ノコトヲ筆談ス問
貴國皇帝是男是女答是女問若貴國有進貢我皇
帝答否問貴國有省城州城縣城答有等ノ數語ニ

シテ其他ハ記セス長人モ亦タ彼ノ支那人ニ問
フニ尤ノコトヲ以テス貴國皇帝年紀如何答我
皇帝年齡七八歳ト官吏ニシテ自國皇帝ノ年紀
ヲ記セサル實ニ驚クヘキナリ是ノ如ク長人一
人ノ清國人中ニアルヲ以テ之レヲ見ントシテ
集ル者更ル々來リテ衣服其他ノ品物ヲ弄シ
恰モ我國開港ノ始メ外國人ニ於ケルカ如シ暫
クシテ歸館ヲ報シ領事ノ僕清國人某來テ長人
ヲ導キ門外ニ出テ一挺ノ轎ヲ指示シ之レニ乘
レト手様ヲ以テ示セリ故ニ之レニ乘ル艦長等

モ亦門内ヨリ轎ニ駕シ至ルヲ以テ其後ニ順シ
テ帰途ニ上レリ此時モ亦三声ノ祝砲ヲ發ス元
来市街ハ狹小且不潔ノミナラス庶下ニ野菜菓
子肉類等ノ物品ヲ併置スルヲ以テ轎夫或ハ店
前ニアル賣品ニ觸レ人ハ往來ヲ止メ殊ニ十字
街ノ如キニ至テハ前方ノ轎夫ハ商家ノ前戸ニ
支ヘラレ後方ノ轎夫ハ同シク他家ノ柱ニ支ヘ
ラレテ往ク能ハサルコト屢々アリ其往來ニ不
便ナル斯ノ如シ
十五日雨正午五十八度午前十時清国軍艦來テ

我艦ノ後方ニ至リ碇泊ス暗ニ我軍艦ニ備フル
モノ、如シ
十六日曇正午六十七度午後七時笠間艦長領事
并ニ書記生等ヲ招待ス依テ鼎介長人及ヒ譯官
国司政輔モ共ニ招待セラル此日厦門港ノ圖ヲ
買得ス素ヨリ清国人ノ画ケルモノナルヲ以テ
廣義高低等實測セシモノニアラス然レドモ諸
官廨及ヒ砲台ノ各縣等ハ之レヲ詳記セリ
十七日半晴正午六十八度午前九時山口五郎太
ヲ教導トシ厦門島ニ在ル砲台ヲ一見セントシ

先ツ清国人某方ニ至リ依頼ス其姓名ヲ聞漏セ
百識アル者ニシテ支那同氏ハ人ヲシテ其知人
船ノ税関吏ナリ我因陸軍ヲ招キ鼎介等ニ面
タル頼忠開軍曹位ノ官陸軍ヲ招キ鼎介等ニ面
接セシム爰ニ於テ頼氏ニ導カレ先ツ同氏ノ率
ユル所ノ兵卒ノ屯在スル処ニ至ル其兵員凡ソ
三十員ニシテ銃器ハ「エ」ン「フ」イルドヲ携ヘ火薬
爆発管及ヒ圍彈等ハ集メテ之レヲ一小囊中ニ
收メ紐ヲ以テ糊杖ニ鈎セリ其火薬四彈ハトモ
ニ粗思ニシテ實用ニ堪ヘ難ク且ツ手銃ト雖モ
間々撃鉄ヲ疑鈎ニ鈎スル能ハサルモノアリ又

兵卒等ハ數石ノ上ニ莖ヲ敷キ既ニ午前十時ヲ
過クト雖モ寐ルモノアリ或ハ小片ノ紙札ヲ以
テ賭スル者アリ更ニ規律アルコトナシ且此兵
員等ハ哨兵ノ如キモノニシテ一寺院ニ派出セ
シモノ、如シ暫クシテ此寺院ヲ去リ頼氏ノ
教導ニ依テ武口ノ砲台ニ至ル此砲台ハ厦門島
ノ西南岸ニアリ半圓形ニ造設セリ大砲六門内
一門ハ「アルム」ストロク「四十」行位ノモノ他ノ
五門ハ口装旧製砲ニシテ六十磅位ノモノナリ
又小銃ハ口装銃ニシテ真鍮ノ上帯ヲ用ヒ銃身

ニ着色セサルモノナリ想フニ旧製ノ蘭銃ナル
 ヘシ其床尾ノ損傷スル所ヲ真鍮ヲ以テ繕フタ
 ルモノ数挺アリ兵員五百名許砲台ハ糊ト石灰
 トニ土ヲ混和シ搗固セシモノ、由ナリ砲坐ノ
 上ハ必ス之レヲ覆ヒ上層ヲ作り一門毎ニ隔障
 アリ且上層ニハ胸壁ヲ附シ之レニ銃眼ヲ穿チ
 タリ又銃眼ノ下辺ニハ竹筒ヲ挿入シ旗ヲ建テ
 得ル如クニ作為セリ兵装ハ通常ノ清国服ニ蒲
 色ノ縁ヲ取り胸ト背部トニ左圖ノ如キ文字ヲ
 記セリ



練兵ヲ親兵ト記セルアリ又前
 哨ヲ後哨ト記セルアリ右方ニ
 在ル口口ハ印影ナリ

此砲台モ亦暫時ニシテ去リ三四町ヲ經過シテ
 島空園砲台ニ至ル此砲台モ同シク厦門島ノ西
 南岸ニシテ武口ヲ距ル數町ノ所ニ在リ砲及ヒ
 銃器人員ハ武口ト異ナルコトナシ只「アルムス
 トロシク砲ハ稍々小ナリ總テ砲台ノ圓形ナル

所ハ下ニ砲ヲ据ヘ上層ハ五六間許モ平坦ニ十
シ胸壁ノ上部ニ銃眼ヲ穿テリ又官舎各營等ハ
堅シテ中央ニ正廳ヲ設ケ其左右ニ兵營ヲ構造
セリ其正廳ノ前面左右ニハ必ス銃架ト刀及又
ヲ装置ス其刀又ノ如キハ瑕アリテ恰モ鋸齒ノ
如シ一見終テ南普陀ニ至ラントシ操練場ヲ過
ク此所ニテ清國人ノ射的ヲナス者アリ依テ近
接シテ之レヲ見ルニ其手銃ハ大概和銃ニ類セ
リ内一名普因ノ「モ」ゼル銃(カラビ)又ヲ携ヘ
リ姿勢モ亦我古流ニ近シ距離ハ僅カニ四五十

米突ニシテ的ハ木片ニ只赤キ四形ヲ上中下ニ
三個画キタルモノナリ十二三四回モ放射セシカ
一發モ命中セス又其側方ニ大ナル銃的アリテ
大陽ノ洋中ヨリ登ル番ヲ画ケリ大サハ幅五六
米突登三「メ」ト「ル」許ナリ夫ヨリ南普陀ニ至リ
テ終ニ午後一時帰途ニ上レリ
十八日微雨午後半晴正午六十七度昨日頗氏ニ
約セルヲ以テ笠間艦長及ヒ鼎介長人ト共ニ山
口五郎太ヲ教導トシ税関吏某方ニ至リ頼氏ヲ
迎ヘ端舟ニテ嶼仔尾及ヒ龍角尾ノ二砲臺ニ至

此二砲台ハ武口島空圍ノ砲台ト相對スル陸
地ノ東北岸ニ在リ共ニ花剛石ノ屹立セル岩山
ノ山尾ニ築キタルモノニシテ正門ニハ播盪烟
塵光緒二年十月日海國雄藩等ノ二扁額ヲ掲ケ
リ砲臺ノ構造ハ武口島空圍ト異ナルコトナシ
只此砲台ニハ「アルムストロンク」砲ナク口裝砲
六門アレドモ稍小ナリ然レトモ近日清國軍艦
萬年清号ニ積載シ來リタル巨砲ヲ備フルト云
フ此砲台ノ上ニテ刀ト又ヲ使用セシモノアリ
シカ鼎介等ノ至ルヲ見テ直ニ其技ヲ止メタリ

故ニ之レヲ一見センコトヲ望ミタリシカ漸ク
ニシテ需メニ應シタリ其技タルヤ二人相並テ
使用シ恰モ我國ノ居合技齒磨賣ノ如シ然レト
モ衆中此技ニ熟セシモノヲ撰ヒタルモノ、如
シ夫レヨリ又砲坐ノ傍ニテ小銃ノ技藝ヲナセ
リ故ニ往テ之レヲ見ルニ十數年前我國ニテモ
蘭式ト稱シ行ヒタル側面ヨリノ操掛リ打方ト
操退打方ナリ實ニ躊躇シテ活発ナラザリシ然
レトモ伍中ノ一名技ヲ誤リシ者アリシトキ号
令官鞭ヲ以テ其背ヲ二三鞭歐打セリ之レ全ク

鼎介等ノ見ル故ヲ以テナルヘシ又僅カ行進ヲ
ナサレメシニ前ヘトモ云フヘキ豫令ニテ左足
ヲ半歩許踏ミ出シ進メトモ云フヘキ發動令ニ
テ行進ヲ始メタリモカ一歩ヲ隔テ、左足ノミ
ハカヲ極メ地ヲ踏打セリ斯ノ如クシテ行進セ
ハ僅々ノ距離ト雖モ大ニ疲労スルナルヘシ夫
レヨリ砲台ヲ去リ海ニ向テ左方ナル砲台ニ至
ル此二砲台ハ相距ル僅カニ二千メートル許ナ
レトモ互ニ山上ニ在ルヲ以テ山ヲ降り再ヒ登
リテ龍角尾ニ至ル正門ニハ龍角尾藩ノ四字ヲ

書セル扁額ヲ掲ゲタリ他ノ砲台ハ其外面ヲ悉
ク石灰ニテ塗リモカ此砲台ノミハ石ヲ以テ掩
ヘリ亦此砲台ニハ砲門ハアレトモ砲ヲ備ヘス
然レトモ山ヲ降りテ全ク海濱ニ臨ミタル所ニ
半月形ノ別堡アリテ之レニ口装ノ大砲三門ヲ
備ヘリ嶼仔尾砲台ノ砲ト異ナルナシ又砲台ノ
一側ニハ大堅火藥庫ヲ設ケ其内部ノ結構ハ之
レヲ知ルニ由ナシト雖モ實彈ヲ以テ數回ノ砲
撃ヲ施行セハ破碎スル難キニアラサルヘシ元
來此日ハ武口ト鳥空園トノ中間ニ在ル兵營ニ

モ至ルヘキ筈ナリモカ談管ハ本日當地衛戍兵
ノ總指揮官射撃ヲ試験中ノ故ヲ以テ果サス此
日ハ彼ノ税関ノ官吏某及ヒ賴氏モ我軍艦ヲ一
見センコトヲ望ムニ依リ之レヲ艦長ニ依頼シ
且ツ艦中ニテ酒飯ヲ饗セリ此間龍角尾砲台ノ
士官モ亦來テ我軍艦ヲ一見スルコトヲ乞ヒ艦
長ノ許可ヲ得艦内ヲ一見シ直ニ退艦セリ
十九日雨正午六十八度本日ハ笠間艦長鼎介長
人及ヒ海軍士官水兵若干名山口五郎太ヲ通辨
トシ漳州府へ出發スヘキ筈ナリモカ今朝來ノ

大雨ヲ以テ果サス此行ヤ川路ヲ派ルヘキラ以
テ西洋形帆走船一艘ヲ雇フ故ニ我艦ノ傍ニ來
リテ停泊ス午後ニ至リ彼ノ船中ニ於テ遽カニ
泣涕叫喚スル者アリ甲板上ニ登リ彼ノ船内ヲ
窺フニ水手ハ悉ク支那人ニシテ十四五歳ノ男
子ヲ打撲スル慘酷ヲ極メタリ幸ヒ本日同行ス
ヘキラ以テ山口五郎モ來艦セルカ故ニ同氏ヲ
シテ如何ナル事故アルヤト問ハシメシニ彼ノ
支那人答ヘテ曰ク梳髮ノ為メ屢門ヨリ來船セ
シ後チ屢門ニ飯レト余スレドモ從ハス故ニ斯

ノ如シト然レトモ其情況ト支那人ノ風ヲ以テ
考フレハ必ス賣奴トナスヘキ工ミナルヘシ暫
クシテ終ニ水手二名ニテ手足ヲ採リ端舟ニ移
シ遙カニ厦門地方へ去レリ彼ノ水手等ハ少シ
モ患フルナク互ニ相笑フテ談話セリ實ニ憫然
ノ至リナリキ

二十日快晴正午七十三度午前七時五分從行清
國官吏仰寬氏ト共ニ本艦ヨリ帆走船ニ移リ厦
門港ヲ發シ川路ヲ洑ル六十里ニシテ海澄城ア
リ船中ヨリ遠望スルニ一面ハ川ニ據リ他ノ三

面ハ開闊ニシテ千四五百「メートル」ヲ隔テ、山
脈アリ此地ヨリ尚ホ洑ル十里ニシテ午前十一
時三十分石碼ニ着ス直ニ上陸市街ヲ逍遙シ終
ニ城中ニ入レリ此城ハ往昔鄭成功ノ構造セシ
モノニシテ其廣サ一町四方東西二門アリ又水
門アリ市街ハ厦門ヨリモ不潔甚ク兵員ハ
合計凡ソ四十名許ニシテ服装ニ二種ノ別アリ
一ハ胸ト背部ニ甲号ノ如ク記シ他ノ一ハ背部
ノミヘ乙号ノ如ク記セリ

甲
府分碼石
民壯

文字朱服地黒
木綿 縁赤

乙
水勇

文字赤服地
青木綿縁赤

民壯ハ凡三十人水勇ハ凡十人ニシテ水勇ハ帽
ヲ冠ラス又民壯水勇トモニ武器ヲ携ヘス香ヲ
穿タス洗足ノ者多シ

二十一日晴正午七十二度本日モ快晴ナレトモ
河水甚タ濁レリ之レ發源遠ク且ツ兩岸硬固ナ
ラサル故ナルヘシ又河幅ハ二百五十「メートル」
内外ニシテ石碼ヨリ上流ハ河底淺ク大船ハ航

スヘカラス故ニ西洋形帆走船ハ石碼ニ繫船セ
シメ他ノ小舟ヲ雇フ之レカ為メ多ク時間ヲ費
ヤシ漸ク午前十時四十五分石碼ヲ發ス川路ハ
恰モ我カ渡川ノ如ク四周平坦ニシテ遙カニ山
脈ヲ見ル此地ハ時トシ水災ノ患アリト雖モ水
堤ノ備ナシ米ハ輸出スルニ至ラスト雖モ該地
人民ノ食料ニ供スルニ足レリト此川路ヲ洑ル
三十里ニシテ午後一時三十分障州府ニ達ス石
橋アリ長サ凡百間許之レヲ星橋ト号ス直ニ上
陸官吏ニ導ビカレ東門内外司徒名地三山館ニ投

宿ス談館ハ客館ナレドモ只破レタル寐臺ト椅
子トヲ備フルノミ他ニ家具アルコトナシ之レ
清国一般ノ風ニシテ凡ソ旅客ハ寐具ヲ携フル
ヲ常トス夜中蚊多クシテ眠ル能ハス此行ヤ幸
ヒ水兵六名從行スルヲ以テ食料ハ常ニ我困風
ニ製セリ午後三時過キ市街ヲ逍遙シ山口五郎
太ノ知人アルヲ以テ総鎮府ニ至リ王振宗ナル
者ニ面會シ後會ヲ期シテ歸ル午後七時三十分
知縣ヨリ酒肴ヲ送レリ
二十二日晴正午七十一度早起直ニ盥嗽セント

スルニ井水微温ナリ警テ之ヲ山口五郎太ニ問
フニ此二三軒近傍ノ井水ハ悉ク斯ノ如シト且
水中塩氣ヲ含有ス午前十時笠間艦長道台ヲ訪
フ道台ハ陳鴻翔号伊鷹初メ廈門鼎介等ニ從フ
紙砲ヲ放ツ例ノ如シ談話中兵制ノコトヲ問フ
ニ道台ハ尤ノ如ク答ヘリ然レトモ恐ラクハ欺
言ナルヘシ其言ニ曰ク各地屯戍ノ兵員ハ龍溪
縣石碼百名、海澄縣城五百雲霄、詔安、漳浦、平和、一
營ニ各六百名漳州府陸兵三千水勇六百名戸數
凡ニ万ナリト此地ハ現今大ニ衰微ヲ顯ハセリ

ト何ノ故ナルヲ知ラス但シ府中ハ長毛賊ノ為
メニ焼夷セラレ未タ家屋ヲ建築セサル街衢数
処アリ午後第一時知府毓璋ノ許ニ至ル談家ハ
道台ノ家屋ヨリモ美ニシテ其門ノ如キハ高サ
凡ニ丈餘塗ルニ朱ト白墨トヲ以テシ室内モ亦
美麗ニ裝飾セリ同二時知縣八姓十四名(滿州人)
号壽徵ノ許ニ至ル同氏ハ年既ニ耳順ニ近ク道
台知府等ニ比スレハ稍外交ヲ知ルモノ、如シ
同三時鎮台林宜華ノ宿所ニ至ルハキ筈ナリシ
カ久シク病ニ罹ルヲ以テ辞ス故ニ中營參府劉

煥台号維興ノ許ニ至ル談兵制ノ事ニ及フ然レ
ドモ答フル所甚タ明晰ナラス之レ清國人ノ風
トシテ外人ニ内事ヲ秘スルト且其兵制我國ノ
制ト相同シカラサルヲ以テナルヘシ其云フ所
ニ依レハ林氏ノ領スル兵五千員劉氏ノ領スル
兵一千員ナリト又戰兵一千人ヲ出ストキハ必
ス炊兵百人調理ニ任スル兵二百人汲水ニ任ス
ル兵五十人其他斯ノ如キ兵種数多ナリト是兵
勇丁ノ別アル所以ニナラン其輜重ノ非常ニ多
数ニシテ却テ戰兵ノ少キヲ知ルニ足ルヘシ劉

氏ノ許ニ宿衛セシ兵ハ大槩尤ノ文字ヲ胸背ニ
記セリ但シ別ニ圈内ニ書セス

長勝中營 親兵

上衣 地蒲色 字黒 縁赤
下衣 地木綿色 白

其他胸背ニ長勝中營練兵ト記セシ兵アレトモ
此兵ハ親兵ニ比スレハ大ニ劣リ多クハ老人ノ
ミニシテ其用ニ堪ヘ難シ談話中漳州屯在兵ノ
操練ヲ一見スヘキコトヲ望ミシガ言ヲ左右ニ

シ之レヲ辞シ終ニ部下ノ兵ヲシテ刀又ノ技ヲ
演セシム其間ハ旗數十流ヲ建テ金鼓ヲ打シ合
調ス笑フニ堪ヘタリ然レトモ其技ハ熟練セシ
モノ、如ク能ク金鼓ニ合セリ午後六時道台笠
間艦長ノ宿所ヲ訪フ同八時過歸館ス又王禧年
号新波モ来館ス我相当中少尉同十時歸館ス
二十三日晴正午七十七度三十分午後二時ヨリ
暑気晁モ酷シク午後七時ニ至リ寒暖計八十度
ニ昇レリ午前八時劉氏来訪シ續テ毓氏八氏モ
来訪ス悉ク轎ニ乘リ銅鑼ヲ打チ行装甚夕笑フ

二 堪へタリ午後二時三十分城中ヲ逍遙シ其西
北隅ナル丘阜ニ登ル此高地ハ實ニ該城中ノ要
害ノ地ニシテ城ノ内外一望ノ中ニテリ該府ハ
周ラスニ城壁ヲ以テシ高サ一丈余然レドモ所
々壞敗シ殊ニ砲坐ノ如キハ腐敗シ鉄製ノ砲ハ
半ハ地中ニ埋マル山ヲ下リテ朱子ノ廟ニ至ル
其構造ハ花剛石ヲ以テ柱壁トシ壯大ナレドモ
洒掃セサルヲ以テ亦不潔ナリ此廟ノ下ニ学校
アリ外見ハ壯大ナリ帰途鎮台ノ書記顯官多ク
友ク之レヲ幕高岡ノ許ニ至リ談兵事ニ及フ其答

フル所鼎介等ノ目撃スル所ト相ヒ合シ稍其實
ヲ得タルモノ、如シ其言ニ曰ク漳州全地ニ兵
員凡三千員内子府城内外ニ居住スル者一千二
百員許然レトモ其内若干ノ兵卒ハ農工商等ノ
業ヲ営ムト又當地四周ノ地ハ山路嶮難ナルヲ
以テ洋式ノ大砲ヲ備ヘスト突ニ洋式ノ砲ハ海
岸ニアラサレハ見ルコトナシ之レ未タ山砲ノ
何モノナルヲ知ラサルニ依ルナルヘシ又該城
ハ四門ヲ開キ他ニ水門一個アルノミ花剛石ハ
此地方ヨリ産スル所ニシテ市街ノ小家ト雖モ

大概ハ石柱ヲ用ヒ又市街中所々ニ高サ二丈許
リモアルヘキ門ノ如キモノヲ設ケ悉ク花割石
ヲ以テ造レリ實ニ壯觀ナリ此地ノ武官ノ宅ニ
ハ必ス矢ヲ所持セリ然レトモ弓ハ未夕之レヲ
見ス矢ハ羽ノ長サ我曲尺一尺計鏃ノ長サ二寸
許幅一寸許ナリ此地ハ朱肉ヲ以テ第一ノ産物
トス支那ノ書画家多ク此地方ヨリ産スルモノ
ヲ用フト云フ此日劉氏ノ許ニテ鉄製ノ「レ」ミン
ト「レ」銃十四五挺ヲ見タリ其製造ハ何レノ国タ
ルヲ詳カニセスト雖モ清国製ニアラサルコト

明カナリ

二十四日快晴正午八十五度午前八時三十分漳
州府ヲ發シ流レニ從テ下リ石碼ニテ午餐ヲ喫
シ午後六時三十分廈門港ニ歸着ス江東ノ橋ハ
有名ナル石橋ニシテ石碼ヨリ漳州ニ至ル中央
ヨリ支流ニ派ル五里ナリト然レドモ時日少キ
ヲ以テ至ラス
二十五日曇正午七十一度三十分廈門港近傍ニ
在ル武官ノ姓名ヲ探聞セリ即チ

在城裏 中府楊萬勝 号尊賢
 在石碼 左府賴文經 号綸英
 在厦門 右府鄭榮 号子開
 在砲口 前府楊嵩生 号玉夫
 在劉五 後府梁汝魁 号梅卿
 總帶南字前營張玉峯 号子南
 總帶靖海中營王世明 号輔芝
 總帶靖海左營王康林 号竹筠
 總帶親營彭楚衍 号渭齋
 衙門後督 兵員等左ノ如之
 厦門警戒軍船及之兵員等左ノ如之

艇大軍船 但之支那形 二十艘
 乘組人員三四十人 船長一員 大砲八門
 夾板 但之支那形 艇ヨリ 五十艘
 乘組八員 船長一員 大砲二門
 嶼仔尾及龍角尾ノ砲台 兵員各一百員
 烏空園ノ砲台 兵員二百或ハ一百員
 武口砲台 兵員一百員
 練勇 五百員或ハ二千員ト云フ
 練兵 三千員或ハ七千員ト云フ
 武官大小 一百二十余名ノ下士以上者

清國福建ニ於テ製造セシ所ノ戰艦及ヒ其艦長ノ姓名ヲ得夕リ依テ尤ニ記ス

第一萬年青

船長

鄭溥泉

第二湄雲

屠宗年

第三福星

楊永年

第四伏波

林國祥

第五安瀾

台灣ニテ破碎

第六鎮海

陸倫華

第七楊武

吳世忠

第八飛雲

梁梓芳

第九靖遠

陳紹芳

第十振威

吳永宗

第十一濟安

吳文經

第十二永保

林文和

第十三海鏡

柯國棟

第十四琛航

林高耀

第十五大雅

台灣安平地方ニ於テ破碎ス

第十六元凱

且珊泉

第十七藝新

許壽山

第十八登瀛洲

鄭魚

第十九 恭安

周鳳震

第二十 威遠

呂翰

第二十一 超武

葉富

不列号

靖海

陳毓崧

海東雲

張擇錦

長勝

李田

鐵炮船 六号

福勝

林承模

建勝

宗定

二十六日 龍驤 沈有恒

虎威 陳錦榮

飛震 張成

策電 邱寶仁

二十六日 晴正午六十九度此日午前鼎介等ハ山

口五郎太ト俱ニ金門地方化在兵副將王國才ニ

會ス之レ支那軍艦萬年青ニ至リニ幸ヒ該氏

モ來艦セシ故ヲ以テナリ此ノ金門島ノ砲台ハ

明末ノ此口建築セシモノニシテ現今屯戍セル

兵員凡一千員該島ノ人民ハ凡二万口ナリト又

我日進艦モ弥々明日ヲ以テ當港ヲ抜錨シ香港
ヘ向テ航行ニ決セリ之レ福州地方ヘ探偵トシ
テ派遣セシ海軍少尉児玉利純歸艦シ一昨年脱
走セシ琉球船モ依然トシテ繫船シアリ昨今琉
球ヨリ脱走セル者モアラス一般ニ諛地方平穩
ナルニ依テナリ
二十七日晴午後一時八分厦門港ヲ発ス故ニ午
前我領事署ニ至ル
二十八日晴正午七十七度航海中
二十九日晴正午七十七度午前八時二十五分香

港ヘ着港午後一時三十分上陸ス本島ハ北緯二
十二度九分東經百十四度八分長サ殆ント九マ
イル幅員最モ濶キ処四「マイル」餘ニシテ一帯ハ
山脉東西ニ連亘シ数多ノ瀾谷アリ其水常ニ絶
エス市街ハ南岸ノ斜面ニ建設セシヲ以テ東西
ノ道路ハ稍平坦ナリト雖モ西南ノ道路ハ悉ク
阪路ナラサルナシ又東隅ニ公苑アリ新旧二區
ニ分ツ其他兵學校病院囚獄瓦斯局製糖所埋葬
地及ヒ競馬場等アリ又英國軍艦數艘碇泊シ港
内ヲ警備シ各國軍艦郵便船支那船等港内ニ輻

潑セリ午後二時我領事館ニ至リ領事安藤太郎
ニ面會シ同港佛蘭西「ホテル」ニ投宿ス不日米因
「グラント」氏當港へ來着スルノ報アルヲ以テ諒
港ニテハ夫々準備中ナリ
三十日晴午後三時米因「グラント」氏着港我日進
艦ヨリ二十一發ノ祝砲ヲ發ス米因軍艦之レニ
應砲ス英國兵歩兵九一小隊并樂隊警察官等波
戸場ニ至リテ同氏ヲ迎フ諒港ニ在ル外國人等
ハ悉ク出テ同氏ノ上陸ヲ見ル立錫ノ地ナシ
五月一日晴昨夜歐洲ヨリ帰朝ノ太政官兼文部

省大書記官九鬼隆一鼎介等ノ旅舎ニ來リ明二
日午後二時拔錨セラルヘキニ依リ同氏ニ托シ
第四号報告書ヲ發進ス此日日進艦乗組英人「セ
ームス」氏ノ教導ニ依リ製糖所ヲ一見ス諒所ハ
東隅ノ海岸ニ在リ支那人ヲ雇役シ製糖甚夕盛
大ナリ
二日晴記事ナシ
三日半晴午後微雨本日午前八時西洋形汽船「ア
イチャン」号ニ投シ香港ヲ發シ午後四時廣東ニ
達ス廣州府ハ廣東省ノ主府ニシテ北緯二十三

度七分十秒東經百十三度十四分三十秒ニシテ
珠江ノ北岸ニ在リ此府ノ地タル天然航海ノ便
ヲ占メ又タ内地ニ位シテ耕植ニ宜シク防禦ニ
便ナリ加ルニ二三ノ大河及ヒ其支流ニ因リ全
省中遠隔ノ地ニ至ル迄運漕ノ便ヲ得清國最良
ノ地ニシテ隨テ外國貿易モ繁盛ヲ極ムト云フ
沿河ノ諸村邑ニ八層或ハ六七層ノ塔アリ實ニ
其建築ノ巧ナル驚クヘシ黃埔ニ暫時止船ヌ又
此地ヨリ小許ニシテ滬洲塔アリ高サ二十二丈
ナリト云フ

四日微雨雨ヲ冒シ市街ヲ道徃シ城内ニ至ル此
地ハ北京ニ亞グヘキ大都ニシテ家屋稠密戸數
無慮三十余万ナリト然レトモ猶ホ之レニ船中
ニノミ居住スル者ヲ合算スレハ蓋シ人口大ニ
増加スヘシ又城郭ハ凡テ四角形ニシテ城壁ノ
高サ二丈四五尺北方ニ至リ地勢漸ク高ク十二
ノ城門ヲ開ク市街ハ厦門及ヒ漳州等ニ比スレ
ハ稍街路大ニシテ家屋モ亦美ナリ船中ニ居住
スル者ハ其船ヲ河中ニ碇繫シ且ツ互ニ相ヒ連
繫シ艦ヲ以テ通路トス故ニ恰モ一市街ノ如シ

夜中頻リニ弦歌ノ声ヲ聞ク窓ヲ開テ河上ヲ望
メハ各船燈ヲ點シ人声ノ鬧然タル午後一時ニ
至ル之レ所謂ニ苑船ト稱スルモノナリ又本日
市街徜徉中大佛寺ニ至ル談寺ニハ銅製金塗ノ
大佛像三坐ト木製金塗ノ佛像數坐アリ其大佛
ノ如キハ跪坐スル膝下ヨリ頭上迄ノ高サ約二
丈ナリ此寺ノ中門下ニ旧製ノ砲數百門ヲ置ク
恰モ砲廠ノ如シ然レトモ砲架ヲ用ヒス只地上
ニ横卧ス又歸途當府第一ノ金穴ト稱スル伍給
棠ノ許ニ至ル談家ハ清潔ニシテ壯大ナルモノ

ナリ此日書肆ニ於テ廣東通誌ヲ買得ス
五日晴午前八時「アイチヤン」号ニ投シ午後四時
香港ニ歸渡ス歸路ハ川路ヲ轉シ上航シ一島ヲ
繞リテ香港ニ達セリ此川路モ所々砲台アリ又
高塔アリ十二時午餐中米田前大頭領「グラント」
氏ノ廣東ニ行ク汽船ニ逢ヘリ
六日雨五時雷鳴此日厦門在留ノ山口五郎太ヨ
リ香港迄傍ノ圖ヲ送致ス
七日曇此地ハ即今晴雨常ナク黒雲天ヲ蔽ヒ雨
ヲ降ス數分時ニシテ忽チ雲去リ晴天ヲ見ルコ

ト日ニ三四回之レ此地甚時ノ氣候ナリト云フ
又本日市街ヲ逍遙シ廣東河航圖香港近海及安
南近海航海圖支那風土病ノ医書并仙頭スッヨリ廣
東迄ノ陸行記事書廣東記事書ヲ購求ス
八日雨曾テ廣東ニテ買得セシ廣東通誌ヲ送致
シ来ル
九日雨午後七時三十分歐州ヨリ帰朝ノ筑波艦
来澳ス
十日曇十時當地ノ造船所ヲ一見セン為メ造船
所々長「ギリリス」氏ニ導カレ笠間日進艦長同艦

乗組英人「ゼ」ムス氏及ヒ同艦士官ト同行セリ
造船所ハ二ヶ所ニ在リテ一ハ本港ノ北方陸路
六英里海路七英里半ノ地ニシテ一ハ同港ノ對
岸ニ在リ預メ「ギリリス」氏ヨリ小蒸気船ヲ備フ
ルヲ以テ之レニ搭シ波戶場ヲ發シ僅カニ五十
分時ニシテ北方ナル造船所ニ達ス航行中風景
最モ佳ナリ就中瀑布ノ直ニ海中へ注クアリ又
岸上ニハ電信分局屠牛場アリ北方ノ造船所ハ
「ドック」ニケ所アリ一ハ深サ十八尺長サ若干尺
他ノ一ハ深サ二十六尺長サ四百四十尺ナリ現

今気船一艘大ナル「ドック」ニ歛テ修繕中ナリ然レドモ附属ノ鑄造場木工場等ハ甚タ寥々タリ一見終テ香港ニ帰り午食ヲ喫シ再ヒ気船ニ搭シ對岸ノ造船所ニ至ル談場ハ北方造船所ニ比スレハ昨今工業盛大ニシテ「ドック」ニヶ所トモニ皆気船ヲ修覆セリ其「ドック」ノ大サハ一ハ長サ三百五十尺深サ十八尺他ノ一ハ深サ十四尺長サ二百四十尺ナリ此日「グラランド」氏廣東ヨリ當港ニ歸着ス

十一日雨我領事署及ヒ日進艦ニ至ル

十二日晴鼎介當地奉行并ニ佛國領事ヲ訪フ蓋シ佛國領事ヲ尋問セシハ不日西へ出発スヘキヲ以テナリ又第四号報告ヲ發進ス此日午前十一時「グラランド」氏當港ヲ發ス午後同氏ノ為メ本港公園ニ於テ「ガーデンパーテ」ノ催アリ園内ハ悉ク毬燈ヲ掲ケ瓦斯ニテ「ゼ子」ラールグラ「ド」ノ数字ヲ顯シ且ツ同氏ノ像ヲ燈籠ニ画キ高ク綠葉門上ニ掲ケ時々揚火ヲ放チ樂隊樂ヲ奏セリ實ニ瓦斯及ヒ毬燈ニテ恰モ白昼ノ如シ當地在番ノ紳士多ク妻兒ヲ携ヘテ至ル我領事

夫婦モ亦來會セリ
十三日晴本日弥便船アルヲ以テ遠用ノ荷物ハ
三井物産會所ニ托シ午前八時我領事館ニ至リ
本日出發スヘキ旨ヲ告ケ佛國領事ヲ訪ヒ直ニ
波戸場ヨリ日進艦端舟ニ搭シ本艦ニ至リ別辞
ヲ述ヘ再ヒ端舟ヲ以テ佛國郵便船「シンド」号ニ
搭ス日進艦長及ヒ乗組士官二三名來船ス十二
時過キ香港ヲ發港ス客中ニ西班牙國ノ海軍將
官某氏其家族及ヒ從行官アリ
十四日晴航海中

十五日時々雷鳴雨航海中
十六日晴午前八時柴根河ノ河口ニ達ス其北方
陸地ノ突出セル所ヲ「サンヂヤク」岬ト云フ此岬
ハ柴根河ノ河口ヲ扼シ要害ノ地タルヲ以テ他
日砲台建築ノ議アリト是レヨリ水先案内ヲ雇
ヒ川ヲ泝ル凡三時許ニレテ柴根ニ達ス十一時
三十分上陸同港「ユニヴェール」ト名クル「ホテル」
ニ搭宿ス其柴根河ヲ泝ルヤ四周皆十洲岬ニシ
テ叢樹ヲ生シ其間ニ數派ノ流水縱横ニ流レ我
船ノ航行スル川路ヲ辨スル能ハス實ニ航海者

ノ困難トスル航路ナルヘシ毎歲數回航行スル
佛國郵便船ト雖モ水先案内ヲ雇フヲ以テ知ル
ヘシ碇泊場ハ真ニ辨理ニシテ郵便船ノ如キ大
船ト雖モ直ニ横ニ波止場ヘ繫碇スルヲ得ル又
「ホテル」ハ之レニ及シテ大ニ不辨ニシテ自家ニ
據テ喫食セシムル「ホテル」ハ本港中只一ノ「ホテ
ル」「フアーブル」アルノミ想フニ此地ハ只佛國人
ノ至ルノミニシテ佞令ニ他國人ノ歐州ヨリ亞
細亞ニ航スル者アリテ佛國郵便船ニ搭シ此地
ニ至ルモ白昼逍遙スレハ夜ハ必ス歸船ニテ眠

ニ就ケリ佛國人タリトモ必ス預メ其寓居ヲト
シ旅舎ニ在ル者稀レナル故ナルヘシ
抑モ本港ハ北緯十度四十六分東經百〇四度二
十分五十八秒ニシテ柴根河ノ東北岸ニ在リ其
近傍ノ地ハ平坦ニシテ山岳ヲ見ス沼澤多シ然
レドモ現今ハ開拓其宜ヲ得地勢大ニ一変セリ
ト西根河ハ源ヲ「カンボジユ」ノ國境ニ發シ西北
ヨリ東南ニ流レ柴根ヲ經テ海ニ入ル其河幅ハ
本港ニテ四百「メートル」深サ十「メートル」ナリト
又此地ノ佛領トナリタル原因ハ千八百二十年

己來交趾支那ニ於テ佛國宣教師等ヲ処スル最
モ慘酷ヲ極メタルヲ以テ佛國戰艦來リ其罪ヲ
問フ數回後チ亦佛蘭西及ヒ西班牙人ニ對シ無
法ノ所為アリシヲ以テ千八百五十八年西國會
盟シテ交趾支那ヲ討罰シ翌五十九年佛人柴根
ヲ略取シ六十年ヨリ六十二年ニ至リ遂ニ交
趾支那ヲ佛領トナスニ至レリ然レドモ此交趾
支那ノ稱ハ安南帝國全土ノ稱ニシテ佛領交趾
支那ハ安南所轄「カンボジユ」ノ一部「ビヤンホア
」^{「ヂヤヂン」}及ヒ「ヂンツン」ノ三州ヨリ成立シ佛

人之レヲ「バリス交趾支那」ト云フ
佛領交趾支那ハ其幅員凡六萬「キロメートル」ニ
シテ之レヲ四郡十九區ニ分チ柴根ヲ首府トシ
茲ニ「グヴェルヌエウール」ヲ置キ且ツ兵權ヲ掌
ラシム故ニ必ス海軍將官ヲ兼ヌ其行政施設ノ
法ハ自カラ緩嚴ノ別アリト雖モ槩ネ本國ト大
同小異ニシテ上等ノ官吏ハ佛人ヲ採用シ下等
ノ官吏ハ土人ヲ採用ス而シテ其總人口ハ凡百
六十七萬七千余(内領人千〇七十余)柴根府ノ人
口凡六萬五千乃至七萬^{〇歳}出入大約千四百〇六萬

二千「フランシク」ナリト云フ
「バ」ス交趾支那ニ屯戍スル処ノ佛兵ハ總計四
十二中隊ニシテ内ニ聯隊ハ首府柴根ニアリ他
ハ悉ク各地ノ要点ニ配布ス其他土人兵四千三
百四十五人アリ共ニ各地ノ要地ニ配布ス而シ
テ此土人兵ニ要スル軍費一ケ年九百三十一万
八千八百九十「フランク」ニシテ佛兵ハ悉ク「グレ
」銃ヲ携ヘ土人兵ハ悉ク佛国旧製ノ口装銃ヲ
携ヘリ又安南東京ニハ常ニ佛人居留地ノ警備
トシテ一中隊ヲ派遣ス然レトモ曩キニ李逆ノ

コトアリシヲ以テ更ニ其兵員ヲ増加シ三中隊
トナセシカ即今殆ント平定ニ属スルヲ以テ一
中隊ハ既ニ柴根ニ帰營シ現今猶ホ二中隊屯戍
セリ又海砲兵若干名憲兵一小隊工廠砲廠附属
將校下士若干名アリ
土人ノ風俗ハ槩シテ質朴ニシテ支那人ニ比ス
レハ稍勇氣アルモノ、如シ又衣服ハ中等已下
ノ者ハ短袴ヲ穿テ上衣ハ用フル者稀レナリ故
ニ腰間ニ一小囊ヲ附着シ貴重ノ物品ハ此囊中
ニ收ム

柴昆ノ季候ハ一千八百七十四年ヨリ七十七年迄ヲ平均セシニ「サンチグラード」寒暖計ニテ冬月寒暖ノ差左ノ如シ

一月 二十四度五
 二月 二十六度一
 三月 二十七度七
 四月 二十八度三
 五月 二十八度三
 六月 二十七度一
 七月 二十七度一

八月 二十七度
 九月 二十六度八
 十月 二十八度八
 十一月 二十六度四
 十二月 二十五度四

十七日晴正午八十八度此地ハ五六七月ノ間ハ一日一回或ハ二回雷鳴降雨ス就中五月ヲ以テ最モ不良ノ候トス故ニ午前十時迄ト午後三四時ノ比ヨリ業ヲ營ミ其他ノ時間ハ昼間ト雖モ悉ク休業ニ市街ヲ歩行スル者甚夕稀レナリ之

レ全ク暑氣ノ酷烈ニシテ正午前後歩行スルト
キハ光線ノ為メ眩暈轉倒スルニ至ルニ由ルト
鼎介等モ昨日此地ニ到着スルヤ殊ニ暑氣ノ甚
タニキニ苦シム然レドモ日々一兩回雷鳴降雨
シ否ラサレハ夜間ニ至リ市街へ水ヲ灑ケリ且
ツ十一時過ハ空氣モ自ラ清涼ナルヲ覺エ少シ
ク昼間ノ苦ヲ慰スルト雖モ涼風絶へテアルコ
トナシ此日ハ書ヲ「ググエ」ル又「エウ」ル奉
官大尉「フエロ」氏ニ送り奉行ニ面會ノ時日ヲ
照會ス但シ到着スルヤ直ニ書ヲ送ルヘキ筈ナ

リシカ旅館ノ不辨ト給仕人(安南人)ノ佛語ニ通
セサルトラ以テ果サス午後四時過キ至リ副官
「フエロ」氏ヨリ來ル月曜日七時半前ヨリ同九
時半迄ノ間ニ奉行ノ面會スヘキ旨ヲ回答セリ
談夜十一時ニ寒時計ヲ檢セニ昼間ヨリ下ル
コト僅カニ一度ニシテ則チ八十七度ナリキ
十八日晴正午八十八度本日七午後四時過キ遠
カニ雷鳴大雨アリ午後六時三十分ヨリ市街ヲ
逍遙シ曾テ香港ニテ日本人一名此地ニ在住シ
剪髮ヲ以テ業トスルアルヲ聞ケリ故ニ之レニ

會逢シ此地ノ風俗其他ヲ諮問セシヲ望ミ剪髮
店アレハ必ス其内部ヲ窺ヒシニ其剪髮店ニ於
テ其骨格容貌恰モ日本人ノ如キ者アリ故ニ其
屋内ニ進ミ入ラントスルトキ彼レ出テ、鼎介
等ヲ迎ヘ却テ鼎介等ヲ日本人ニアラスヤト問
フ依テ鼎介等ノ旅館ヘ來ルヘキコトヲ約シテ
直ニ該店ヲ去リ帰館セリ夜ニ入り彼ノ日本人
鼎介等ノ宿舍ニ來ル故ニ其姓名ヲ問ヒシニ東
京丸山邊ノ者ニシテ杉浦善之丞ト稱シ當時ハ
彼ノ剪髮店ニ雇役セラレ既ニ此地ニ在留スル

二ヶ年余ナリト云フ故ニ当地ノ風土人情等ヲ
尋問セシニ一三四ヶ月ハ常ニ雨ナク氣候モ
亦暑ク五月半バヨリ六七月ハ日々丸ソ一回或
ハ二回ノ雨アリテ三四月比ヨリハ却テ暑氣薄
シ然レトモ此時ヲ以テ最モ風土病ニ感スル者
多シトスト(此説十六日ニ示ス平均寒暖計ト異
ナレリ信シ難シ)又飲水ハ氣船ニテ凡三十分時
ニシテ達スル地方(地名不記)ヨリ支那風ノ船ニ
テ運輸ス之レ当地ハ井泉アルモ甚々淨潔ナラ
スシテ飲料ニ供スル能ハサルヲ以テナリ且ツ

風土病ニ感シ死スル者甚ク多シト云フ此杉浦
ナルモノハ曾テ一ヶ年前海路ヨリ東京トキョ都トキョ府トキョ南ノ
ニ至リシコトアリト故ニ其形況ヲ尋ヌレトモ
詳ナラス然レトモ東京ハ柴昆ヨリハ風土モ良
ク又日本人静岡縣ノ人山田庄之助ナル者アリ
テ洋人ニ役セラレ一ヶ月凡四百「フラン」クモ得
ルト此山田ナル者ハ八九歳ノトモ如何ナル事
故アリテカ東京ニ至リ今ハ全ク佛人ノ如クニ
テ日本語ハ却テ甚ク拙シト但ニ当地ヨリ東京
迄ハ海上六日ニシテ遠スト又杉浦ハ恰モ日本

ヲ脱セシモノ、如シ其言フ処ニ據レハ海外旅
行ヲ出願スレトモ免状ヲ容易ニ下附セラレサ
ルニ由リ願中直ニ洋人ト共ニ乗船当地ニ来レ
リト此言ハ大ニ鼎介等ニ對シテ辨解スルモノ
、如シ既ニ其住所姓名モ始メハ実ヲ告ケス後
チ鼎介等此地ヲ出發スルニ至リ船中迄送り来
リ実ハ武州豊島郡前野村八番地杉浦卯之助ナ
リト云ヘリ
十九日晴午前八時ヨリ奉行ノ公署ニ至ラント
欲シ馬車ヲ命シ旅館ヲ出テシカ此馭者ハ佛語

ニ通セサルヲ以テ鼎介等ハ全ク市街及ヒ近傍
ノ原野ヲ徜徉スル者ナラント想像シ市街ノ中
心ヲ距ル凡ソ一里許ノ処ニ至ル然レトモ未タ
奉行ノ公署ニ違セス且馭者ノ挙動怪ニキヲ以
テ退回ヲ命シ前ノ道路ニ就テ退卻セシ処馬車
輻輳セル地アリ依テ因司政輔ヲシテ下車セシ
メ佛語ヲ以テ奉行ノ公署ヲ衆馭者ニ尋子シム
レトモ何レモ土人或ハ印度人等ニテ好ク佛語
ニ通スル者ナシ此時既ニ九時十五分前ナルヲ
以テ曾テ奉行ヨリ照會ノ時限ハ四十五分ニ迫

レリ故ニ百方佛人ヲ求ムレトモ居ラス止ヲ得
ス再ヒ車ヲ進メ数町進行シ風ト右方ヲ顧ミレ
ハ一ノ西洋風ノ大屨樹間ニ聳ユルアリ故ニ因
司政輔ヲシテ邸内ニ進入セシメシ処該家ハ區
裁判所ノ如キモノニシテ佛人ノ土語ニモ通ス
ル者アリ依テ之レニ奉行ノ邸ニ行クヘキコト
ヲ馭者ニ命セラレシコトヲ請ヒケレハ甚タ深
切ニ了承シ終ニ其事ヲ馭者ニ命セシカバ馭者
モ再ヒ車ヲ馭セ終ニ奉行ノ公署ニ至レリ時ニ
午前九時ナリ該公署ハ市街中ニ在リテ鼎介等

ノ旅舎ヲ距ル僅カニ八九町許ナリ實ニ土語ニ
通セサレハ斯ノ如キコト多々ナリ此奉行ノ公
署ハ家屋壯大ニシテ當地第一ノ建築ナリ歩哨
二名門前ニ在リ鼎介等ノ門ニ入ルヤ捧銃ノ礼
ヲナス途上ニ於テモ亦屢々兵卒ノ鼎介等ニ對
シ礼ヲナスモノアリ之レ全ク服装ノ致ス所ナ
リ故ニ武官服装ノ如キハ殊ニ注意スヘキコト
ナルヘシ門ヲ入り右方ノ階段ヨリ登リ屋内ヲ
窺ヘハ武官数名侍立セリ或ハ昼間ノ服ヲ着シ
^トエボレット^トヲ附シ或ハ畧装帶釵ス鼎介等ハ此

武官ニ礼ヲナシ室内ニ入レハ一名ノ少尉名刺
ヲ受ケ後室ニ去レリ暫時ニシテ再ヒ來テ鼎介
等ヲ導キ奉行ニ謁セシム奉行ハ年記五十三四
ニシテ温厚ノ風アリ奉行モ^トエボレット^トヲ附シ
服装ヲ整ヘリ之レ昼間公廳ニ在テ事務ヲ採ル
ノ間ハ常ニ斯ノ如クナルヘシ鼎介ハ奉行ニ我
國駐在ノ佛國公使及ヒ御雇教師首長ノ添書ヲ
渡シ且ツ來旨ヲ傳フ其言ニ曰ク今般我國軍艦
日進号支那海岸ヲ巡航シ香港ニ到ルヲ以テ之
レニ塔シ熱帶地方ニ駐屯スル軍隊ノ狀況及ヒ

兵營ノ構造等ヲ一見シ且ツ安南地方ノ地理ヲ
探究センコトヲ欲ス尚ホ詳細ハ添書ニ詳クナ
リト奉行曰ク安南地方ハ佛人ト雖モ未タ陸行
シテ其詳細ヲ探リシ者ナク素ヨリ人口稀疎ニ
シテ道路モ拓ケス其間ダ多少ノ危険ヲ侵サ、
ル可カラス且ツ沿途ノ保護行届キ難ク恐ラク
ハ其目的ヲ遂クル能ハサルヘシ予カ意ヲ以テ
スルニ之レヲ中止スルニ如カス然レトモ強テ
東京ニ往カント欲セハ海路ヨリスルヲ良トス
東京ニハ佛國領事アルヲ以テ佛人ノ居留地内

ハ十分保護スヘシト雖モ内地巡視ハ安南王ノ
許サ、ルコト必セリ故ニ海路ヨリ東京ニ到ル
モ事遂ニ無益ニ屬セン鼎介曰ク貴論ノ旨猶熟
考スヘシ当地兵營其他拜覽ヲ乞フ奉行曰ク諾
本日中ニ巡視ノ順序等ヲ報スヘシト此時正ニ
九時三十分ナリ奉行曰ク公務繁忙ニシテ尚ホ
面謁ヲ請フ者過刻ヨリ集マレリ故ニ今日ハ辞
スト爰ヲ以テ同廳ヲ去リ帰館ス時ニ十時過ナ
リキ午後三時英領事館ニピットマン^氏ノ添書
ヲ携ヘ至リ面會ス同領事ハ佛語ニ通セサルヲ

以テ某佛人通弁ヲナセリ於安南地方巡歴ノコ
トニ及ヒシ処同氏モ道路モナク陸路ヨリハ至
リ難キヲ以テ鼎介等ノ陸行ヲ止ムルコト頻リ
ナリ暫時ニシテ帰館シ「ホテル」フ「アールブル」ニ移
轉ス之レ「ユニヴェルホテル」ハ只居室ヲ貸與ス
ルノミニニシテ食事ハ此「ホテル」フ「アールブル」ニ於
テ辨セリ実ニ不便極マレリ然レドモ此「ホテル」
ハ客室悉ク充塞シ一個ノ空室モアラサルヲ以
テ止ムヲ得ス今日迄移轉セサリシナリ談「ホテ
ル」ハ「ユニヴェルホテル」ヨリハ万事清潔ニシテ

且ツ熱帶地方丈ヶアリテ一室毎ニ必ス一個ノ
水浴室アリ其注意ノ至レル實ニ驚クヘシ鼎介
等ノ此柴昆ニ至ルヤ專ハラ安南地方ノ地理山
川等ヲ探究スヘキ目的ナリシカ奉行又英領事
モ断然此行ヲ止ムルヲ以テ考フレハ必ス道路
モナク外国人ノ陸行スルハ極メテ困難ナルヘ
シ曩キニ佛人「カルニエール」氏ノ陸行セシモ僅
カニ「ビュール」府ヨリ東京迄ナリキ故ニ断然陸行
ノ目的ヲ止メ海路ヨリ東京ニ至ルヘキコトニ
決セリ

二十日晴午後四時雷鳴降雨午前十時奉行ヨリ
書面到来ス其文ニ曰ク兵營其他共巡視差支無
シ且夫々エ布達セシ旨ナリキ本日夕三時三十
分首長司令官ノ代理タル大佐「ベジン」氏ノ邸ニ
至リ面接シ且ツ御雇教師首長「ミニエ」氏ヨリ
ノ漆書ヲ渡タス談大佐ハ千八百六十二年当地
ニ在勤シ又本月ヨリ五ヶ月前ニ此地ニ至レリ
ト故ニ「カンボ」チ等佛国ノ領内ハ過半巡視セ
ル由シ然レドモ安南地方ハ未タ至ラスト云フ
明日ハ同氏ノ傳令士官ヲ鼎介等ノ旅舎ニ送り

七時三十分ヨリ諸兵營等ヲ巡視スヘキ旨ヲ約
シ旅舎ニ歸ル此日書林ニ於テ「ゴニヤン」シ、
「フランセ」一冊安南國誌一冊支那及印度支那
十ヶ年間ノ紀行一冊印度及「イマライヤ」紀行一
冊「シヤムロ、オンボ」チ、ロース」及ヒ印度支那内
部紀行一冊ヲ買得ス
二十一日晴午後十二時三十分雷鳴降雨午前七
時半兼テ約定ノ如ク司令長官ノ代理タル大佐
「ベジン」氏ヨリ其傳令士官ヲ鼎介等ノ旅舎ニ差
遣シ且ツ馬車一輛ヲ備フ傳令士官ハ中尉ニシ

テ「ゴナール」氏ト云フ曾テ佛国「サンシール」ニ於
テ我国ノ舟越某中尉小阪千尋等ノ諸氏ト未キ
兵事ヲ研究シ当地ニ派遣セラレ既ニ一ヶ年ト
四ヶ月ヲ経過セリト暫時ニシテ旅舎ヲ出テ馬
車ニ搭シ海軍歩兵營ニ至ル大尉一名(週番)出テ
、鼎介等ヲ導ヒキ下士官室講堂兵卒ノ居室擊
釵場庖厨罰室等ヲ巡視セシム擊釵場ニ於テ
ハ一室ニテハ曾テ御雇教師「ジクル」氏ノ傳ヘ
シ如ク「エベール」ヲ使用シ他ノ一室ニテハ踊舞ヲ
演セリ其有様ハ年ニ聘ニ當テ二名相對シテ号

令ニ從ヒ豆尖ノミニテ躍レリ夫レヨリ下士官
室ニ至ル一室ニ一名宛ニテ寢臺ハ幅二尺余長
サ六尺許リ四周ニ木柱ヲ建テ之レニ蚊帳ヲ張
ル其蒲團ノ如キハ我カ兵卒ニ給與スルモノヨ
リ却テ不潔ナリ兵卒ノ居室ハ一分隊毎ニ區畫
シ我兵卒ノ如ク頭上ノ架上ニ脊囊ヲ置ケリ然
レドモ体裁一樣ナラス寢臺ハ下士ノモノト異
ナルナシ銃ハ「グラール」銃ニシテ凡一ヶ年前ヨリ
給與セリト又麵包ヲ分配シ机上ニ積載シアリ
タリ其製大ニシテ凡我二行製ヨリ多ク之レヲ

二名ノ一日ノ食ニ供スト云フ此兵營ノ中央ノ
最下ニ洗面場アリ石ヲ以テ作り其前面ニ壁
板ニ數個ノ噴水口ヲ設ケ水ヲ要スレハ口栓ヲ
一捻ス然ルトキハ水ハ噴水口ヨリ噴出シ前ノ
長キ洗面器ノ内ニ注射ス此方法ハ敢テ奇トス
ルニ足ラスト雖モ一分隊ニ數個ノ盥ヲ給与シ
井泉ヨリ水ヲ汲ムヨリハ大ニ便利ニシテ且ツ
清潔ナリ又浴室ハ長サ十間モアルヘキ長方形
ノ一室ニシテ其前面ヲ二三間毎ニ區別シ衣服
ヲ置クヘキ場トシ其背後ニ入口ヲ設ケ之レニ

入レハ其内ハ幅一間長サ十間モアルヘキ長キ
室ニテ下ニ石ヲ敷キ上ニ漏斗形ノ器具ヲ釣リ
兵卒ハ其下ニ立チ前ノ器具ヨリ垂ル、所ノ紐
ヲ引クトキハ水ハ漏斗形ノ器具ノ全面ナル小
孔ヨリ噴出ス其高サハ身幹ヨリ二三尺モ高シ
先導大尉ノ云フ所ニ拠レハ兵卒ヲシテ毎朝此
水浴ヲサセムト故ニ別ニ洗湯室アルコトナ
シ之レ四季共ニ我暑中ノ如クナレバナルヘシ
次ニ講堂ニ至ル下士已下伍長迄三四十名ヲ一
名ノ士官教授セリ鼎介等ノ室内ニ入ルヤ算学

分散ノ加法ヲ試問ス之レヲナスニハ其姓名ヲ
呼ビ起立セシメ其方法ヲ問ヒ次ニ塗板^ト就テ
施術セシム始メノ一名ハ終ニ答フル能ハスレ
テ退キ第二ノ者ハ漸クニ之レニ答フルヲ得タ
リ然レトモ我小學校ノ中等生徒ヨリモ劣レリ
夫レヨリ士官ノ講堂ヲ一見シ終ニ懲罰室ニ至
ル其「アリゾ」(囚獄入)ノ罰人ノ如キハ幅四尺長
サ一丈許ニシテ後ニ寢架ヲ設ク其製我罰室ト
異ナルナシ寢架前ニハ直ニ厠ヲ設ケ之レヲ掩
蔽スルコトナシ又懲罰隊三十四五名許モ重量

ナル背囊ヲ負ヒ罰室ニ向テ捧銃ヲナセリ此兵
營ハ門ヨリ右方ノ一棟ニ兵卒二大隊ヲ容レ左
方モ亦之レニ全シト然レトモ目撃スル処ニ掘
レハ前ノ二棟ヲ以テ我歩兵一大隊ノ人員ヲ容
ル、ニ足ルノミ之レ陸兵ト海軍歩兵ト自ラ其
編制異ナル所以ナルヘレ依テ其編制ヲ尋問ス
レドモ答フル所甚タ明晰ナラス右巡視終テ海
軍砲兵營ニ至ル兵卒ノ各室等ハ歩兵ト大略異
ナルナレ然レトモ歩兵ニ比スレハ一室中ノ人
員僅少ニシテ各人ノ吸収スル空氣ハ多量ナル

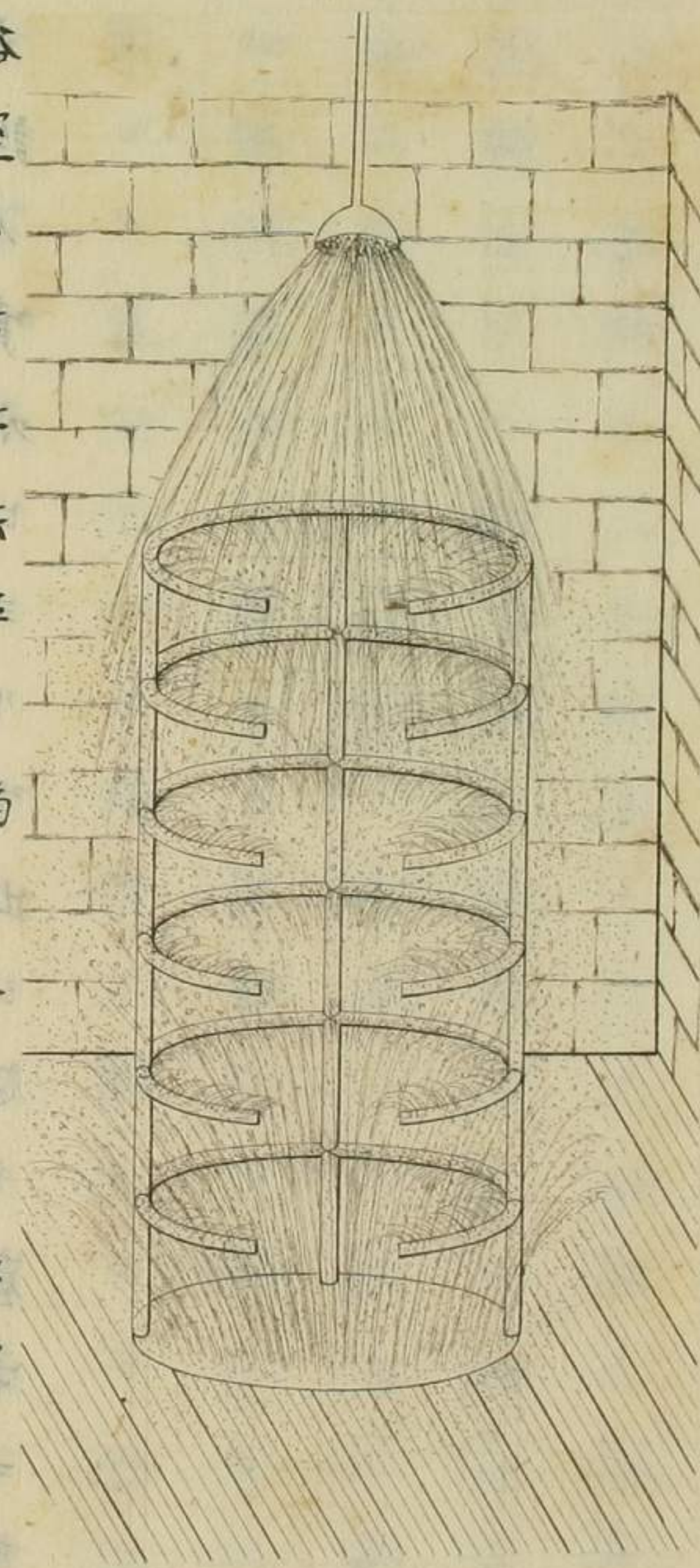
カ如シ又鑄工鍛工木工等ノ工場アリテ蒸気
カニ依テ作業セリ甚タ盛大ナラス砲ハ安南砲
及ヒ古砲等ヲ露天ナル砲架上ニ整置スルヲ見
タリ然レトモ近來世上ニ稱用スル処ノ砲ハ未
タ之レヲ見ヌ水浴室ハ坂兵ト異ナリ地中ニ廣
キ穴ヲ穿テ之レニ石ヲ以テ四壁ヲ作り二條ノ
噴水口ヲ設ケ之レヨリ水ヲ注入ス厩ニハ「アル
ヂエリ」産ノ馬支那馬日本馬等アリ日本馬ハ
先馬ニシテ只一頭ノミナリキ右巡視終テ旅舎
ニ歸リ午後第四時ヨリ憲兵ノ屯營及ヒ病院ヲ

巡視セシコトヲ約シ「ブナ」氏ヲ歸ヘス午後
四時ニ至リ約ノ如ク「ユナ」氏來ル依テ病院
ニ至ル門ヲ入ルヤ直ニ右方ニ一棟ノ家屋アリ
想フニ医官ノ室ナルヘシ漸ク進ム數十歩ニシ
テ左方ニ長キ一棟アリ之レハ旧製ノ家屋ニシ
テ屋棟高カラヌ又建築モ美麗ナラス此病室ノ
前面ニハ士官ノ病室アリ二層ニシテ稍々美ナ
リ士官ハ一室ニ一名ナレトモ四五日前本國へ
前ハ入院モ甚タ多キヲ以テ或ハ一室ニ二名ヲ
入ル、ト寢臺ハ病院ニ依テ發条ヲ用フルアリ

或ハ否ラサルモノアリテ兵卒ノ平素用フルモ
ノヨリハ幅モ廣ク蒲團モ厚クシテ鉄製ナリ兵
卒ノ病室中ニ在ル者ハ過半風土病ヲ患フル者
ナリ又者病人ハ各一室ニ婦人ニ名土人若干名
ヲ附ス此西洋婦人ノ者病人ハ多クハ老婦ニシ
テ頭上ニ白布ヲ戴ケリ夫レヨリ進テ新築ノ病
室ニ至ル談室ハ装置モ整ヒ且ツ栓ト天井トハ
鉄製ナリ之レ談地ハ一種ノ虫族アリテ木質ニ
ハ多ク害ヲ與フルヲ以テナリト此室ノ中央ニ
ハ大ナル水浴室アリ室中ニ深サ五尺余廣サ三

間四方ノ石窟アリテ螺子ヲ轉スレハ水ハ徑五
六寸許ノ噴水口ヨリ噴出シ忽チ窟中ニ充ツ又
其傍ニハ真鍮ヲ以テ前方ヲ開キタル徑三尺許
ノ如圖蛇線形ノ管アリテ螺子ヲ轉スレハ水ハ
管中ニ設ケタル數個ノ小孔ヨリ内方ニ噴出シ
加之頭上ニハ漏斗形ノ器具アリテ數條ノ水ヲ
注下シ又脚下ニモ細孔アリテ數條ノ水ヲ騰上
ス此器械ハ九十年前医員某氏ノ發明スル所
ニシテ大ニ熱帶地方ノ人民ヲ救ヘリト云フ又
此器械ノ前面ニハ恰モ椅子ノ如キ器具アリテ

其下面ニハ小孔数百個ヲ穿チ之レヨリシテ水
 ヲ昇騰セシム之レ起立シアル能ハサル患者ヲ
 シテ水浴セシムル具ナルヘシ



此浴室ハ下士兵卒ノ為メニシテ士官ニハ他ニ
 之レト全シ器具ヲ備フル室アリ又蒸浴室アリ

廣キ方ニ間而側ニ榻ヲ設ケ室ノ中央ニ螺
 子状ノ器具アリ之レヲ轉スレハ蒸浴室中ニ侵
 入シ為メニ室内咫尺ヲ弁セス其他湯浴室アリ
 斯ノ如ク水ノ運轉ヨリ湯浴蒸浴等ニ至ルマデ
 悉ク蒸氣器械ヲ用フ實ニ注意至レリト云フヘ
 シ此病院ニハ現今患者百一名ニシテ内ハ十三
 名ハ悉ク風土病ナリト云フ又死室倉庫看病婦
 室等ヲ一見シテ憲兵ノ兵營ニ至ル幸ヒ憲兵一
 小隊許操練ヲナセリ旧式ニシテ極メテ精練ノ
 モノニアラス然レドモ歩法ノ整ヒタルハ實ニ

感スヘニ帰途工兵科少佐ノ宅ニ至ル誠氏ハ病
中ナレトモ勉メテ面接セリ依テ御雇教師首長
ヨリノ漆書ヲ渡セリ同氏ハ病中ナルヲ以テ百
事意ノ如クナラス故ニ明午前八時附属士官ヲ
鼎介等ノ旅舎ニ差遣スヘキヲ以テ所要ノ件々
ハ宜シク談士官ニ就テ弁セラレンコトヲ乞フ
ト甚タ深情ヲ盡セリ此日傳令使中尉「ゴナール」
氏ヲ饗ス

二十二日晴二時ヨリ雷鳴降雨四時ニ至テ止ム
午前八時約ノ如ク工兵科大尉「ト子」氏來訪ス

談風土地勢等ノコトニ及ビニ同氏ノ云フ所
ニ拠レハ此地ハ風土極テ悪ク且五六月ヲ以テ
最モ酷タシトス故ニ始メテ此地ニ至ル者ハ必
ス風土病ニ罹レリ同科少佐ノ如キ即チ之レナ
リト又兵制ヲ問ヒニ佛国ヨリ海軍歩兵及ヒ
砲兵等ヲ送ルニ其制ヲ本国ト異ニシ特ニ兵卒
ノ員数ヲ多クス之レ風土病ニ罹ル者多キヲ以
テ二百名ヲ送レハ帰国スル者ハ僅カニ百余名
許ニ過キサルヲ以テナリト此地風土ノ悪シキ
徴スヘキナリ此地ノ要点ハ河口ナル「サンヂヤツ

ノ岬ニレテ諫氏ハ此岬ノ測量ヲ擔當シ現今大
概成就セリト又此岬ニ燈台アリ北緯十度十九
分四十四秒三東經百〇四度四十三分四十三秒
六ナリト云フ午後二時半ヨリ諸地畵ヲ一見セ
シフトヲ約シ同氏ハ歸館ス午後二時半ニ至リ
再ヒ來訪ス故ニ同行シテ工兵科少佐ノ官宅ニ
至ル談館ハ上層ヲ居室トシ下層ヲ公署トス之
レ当地一般ノ風ナリ地畵數種ヲ出シテ鼎介等
ニ示ス依リテ鼎介等ハ就中必用ナル柴昆河口
ヲ柴昆ニ違スルマテハ航行畵ト安南東京佛

人居留地ノ畵三四葉讓與セラレシコトヲ請求
シテ歸館ス此時工兵科少佐ハ病ヲ扶ケテ來リ
面接ス其心情想フヘシ本日夕七時半「ゴナール」
氏ヨリ長人及ヒ国司政輔ヲ招ク午後七時同氏
來館共ニ歩兵隊諸士官ノ會食所ニ至リ饗應ヲ
受ケ歸途會食ノ士官(少尉)二名鼎介ニ面接セン
コトヲ切望スル由ニテ「ゴナール」氏ト共ニ旅舎
ニ來ル故ニ之レニ面接シ共ニ海岸ノ咖啡店ニ
至ル之レ諫少尉二名ノ懇望スル所ナリキ柳モ
鼎介等ノ此地ニ至ルヤ佛人ニ依頼シ深ク内地

ニ進入シ東京地方ハ勿論李逆ノ動靜モ探究ス
ヘキ目的ナルヲ以テ始メハ陸行ヲ以テ眼目ト
セシカ当地奉行其他各氏ノ説ニ道路モナク未
タ佛人ト雖モ陸行セシモノナレト其言恰モ一
口ニ出ツルガ如キヲ以テ断然陸行ノ目的ヲ變
シ海路ヨリ東京ニ至ルヘキコトニ決シ其期ヲ
問ヒ合セシニ別ニ一定ノ期アルコトナク只該
地成衛兵ノ為メ必要ニ應シ官ヨリ航行セシム
ルモノナリト爰ニ於テ其便船ヲ待ツトキハ実
ニ際限ナキヲ以テ一度ヒ香港迄帰航シ同地ヨ

リ直ニ東京ニ至ルノ却テ速ナルニ依リ先ツ此
策ニ決ス然レドモ猶ホ或ハ便船ノ三四十日ノ
内ニアラサルヤラ慮リ副官「カンフエロ」氏ニ書
面ヲ送レリ然レトモ今ニ回答ナシ此日司令長
官大佐「ベジン」氏來訪ス然レトモ不在ナルヲ以
テ面接セズ談氏ノ來ル所謂ハ明日午後第七時
半鼎介等ヲ饗應スヘキ案内ノ為メニテアリキ
二十三日晴午前十一時頃ヨリ雷鳴雨本日午前
八時工兵科大尉「ド子」氏來館共ニ建築中ナル
司令長官ノ官宅ニ至リ之レヲ一見ス談館ハ二

層樓ニシテ美麗ナリ上層ヲ居室トシ下層ヲ公
廳トス上層ニハ弄丸場等ヲ設ケ下層ノ階段上
ニハ噴水罫ヲ設ク又門ヨリ直ニ右方ニ番兵室
アリ家屋ハ建築粗ボ成就セリ然レドモ庭園ノ
結構ハ未夕着手セス此建築ハ凡一ヶ年前ニ工
ヲ起シ最早一二閱月ニシテ落成ニ至ルヘシト
云フ午後五時頃「ゴナール」氏來訪ス共ニ縣廳ニ
至ル然レトモ諸官員既ニ退廳セルヲ以テ一見
スルヲ得ス又本日ハ豫テ司令長官代理大佐「ベ
ジン」氏ヨリ招待セララル、ヲ以テ午後七時「ゴナ

ール」氏來館共ニ司令長官ノ官宅ニ至ル談館ハ
「ベジン」氏ノ官宅ニ比スレハ稍美ナリ共ニ會食
スル者ハ中佐一名少佐一名大尉三名軍醫一名
傳令中尉一名ナリ會食中樂隊時々樂ヲ奏シ食
終テ後鼎介等ノ歸館スルトキ階段ヲ下ルヤ又
音樂アリ其饗應甚タ丁寧ナリキ歸館ノトキモ
亦「ゴナール」氏ヲシテ鼎介等ノ宿舍マデ送ラシ
ム此日午前鼎介ハ因司政輔ト共ニ英領事館ニ
至ル

二十四日晴弥々本日夕ヨリ佛國郵便船ニ搭シ

香港ニ至リ更ニ同所ヨリ東京ニ至ルヘキコト
ニ決ス故ニ午前八時旅舎ヲ發シ奉行ノ公署ニ
至リ別辭ヲ述フ奉行ヨリ東京在留ノ佛國領事
ヘ添書スヘキ旨ヲ約シ且ツ云フ曩キニ李逆ノ
反乱ニ依リ東京居留地警備ノ為メ二中隊ヲ増
加シ合計三中隊ヲ屯戍セシメレガ既ニ一中隊
ハ帰營シ他ノ一中隊モ帰營ヲ令シ平常ノ如ク
一中隊ヲシテ居留地ニ屯戍セシムルコトニ決
セリト又李逆ノ動靜ヲ尋子ニ所奉行ノ答ニハ
此件ハ世上ニ於テ評スル如キ重大事件ニアラ

ス已ニ一名ノ士官ヲ之レカ為メ東京地方ヘ差
遣ハセシカ詳報ヲ得ス然レトモ當時李逆ハ安
南ト支那トノ国境ナル山中ニ潜ミ全ク山賊ノ
所為ニシテ人員ハ五六千モアルヘシ然レトモ
銃ヲ携フル者ハ僅々四五名ニ過キス若シ佛人
二百人ヲシテ攻撃セシメバ一撃以テ鏖殺スヘ
シト之レ佛人ノ誇唱ナリト雖モ亦以テ其一班
ヲ窺フニ足ルヘシ且ツ君等仮令東京ニ至ルモ
佛人居留地内ハ妨ケナク視察スルヲ得ヘシ然
レトモ安南地方ニ至テハ旅行ヲ許サバ必セ

リト帰途中佐「ベジン」氏及工兵科少佐ノ官舎ニ
至リ面接別辞ヲ述フ夕六時半工兵科大尉「ド子
」氏及ヒ傳令使中尉「ゴナル」氏ヲ饗應ス午後
十時旅店ヲ發シ十時半郵便船「ヤンツエ」号ニ乘
船ス船客中ニ曾テ普因ニ留學セル華族酒井忠
篤^{スミ}同忠實士族神戸某アリ乗船後工兵科少佐ヨ
リ地圖數葉奉行及ヒ司令長官代理大佐「ベジン」
氏等ヨリ安南東京在苗領事及ヒ佛國士官へノ
添書ヲ送リ来レリ
二十五日晴夜十一時過ヨリ大雨雷鳴午前六時

半抜錨柴昆河ヲ出ル僅カニシテ船ノ進行ヲ止
メ午後一時迄潮合ヲ待テリ
二十六日晴無記事
二十七日晴無記事
二十八日晴午後二時三十分香港ニ着船直ニ上
陸領事館ニ至ル
二十九日晴記事無シ
三十日晴鼎介ハ本日當地奉行并ニ其副官少佐
「ハマナ」氏ヲ訪問ス当地奉行夫婦モ不日日本ニ
至ルヘキヲ以テ安藤領事夫婦モ之レト同行ス

ヘキ旨我外務省ヨリ命アリト又安南行ノ件ハ
柴根奉行モ其利益アラサルヲ切言シ且ツ李逆
モ支那兵ノ為メニ失敗ヲ採リ現今ハ山中ニ潜
伏シ所在モ不明ナラス加之佛人居留地外ハ外
人ノ旅行ハ必ス許スマジト又柴根在番英國領
事モ其利益アラサルノミナラス恐ラクハ目的
ヲ達スル能ハスト其論旨恰モ一口ニ出ツルガ
如シ故ニ空シク往復ニ時日ト莫大ノ金負トラ
費消センヨリ寧ロ我國附近ノ支那沿海地方ヲ
巡視スルノ利益アルニ如カサルヲ以テ豫ジム

東京出發ノ際上申セシ如ク此地ヨリ進退指
揮ヲ仰ギ譯官因司政輔ニ第五号報告書ヲ托シ
明日拔錨ノ采因郵船「ベルジック」号ニ搭シ帰朝セ
シムルコトニ決ス
三十一日晴譯官因司政輔ハ米國郵船「ベルチック」
号ニ搭シ午後三時三十分香港ヲ拔錨ス該船ニ
ハ當地奉行夫婦安藤領事夫婦及ヒ英人「ピットマ
ン」モ便船セリ
六月一日雨「ドニ」府博覽會事務官酒田春雄
外屬官兩名出呂人六七名昨日當港へ着シ香港

「ホテル」ニ搭宿ス食事中出品人ノ中一名酩酊衆
人ノ属目スル所トナレリ然レドモ幸ヒニ他ノ
一名速ニ伴ヒ去リタルヲ以テ甚シキ不体裁ヲ
頭ハサバリキ実ニ公私ヲ問ハス苟クモ外国へ
渡航スル者ハ進退動作ヨリ百般ノコトニ至ル
迄意ヲ注キ志操確乎タラサルヘカラス否ラサ
レハ大ニ我国ノ榮譽ヲ辱カシムルニ至ルヘシ
二日雨午後七時「レドニ」府博覽會事務官酒田
春雄属官二名来訪ス
三日曇当地奉行ノ副官少佐「レマ」氏ハ兵營巡

視ノコトヲ依頼ス此日「レドニ」府博覽會事務
官酒田春雄外若干名悉ク當港ヲ抜錨セリ
四日晴副官少佐「レマ」氏ヨリ明日午後三時ヨ
リ砲台ヲ一見セシムヘキ旨書面ヲ以テ回答セ
リ
五日晴約ノ如ク午後第二時ヨリ三井物産會社
社員執行弘道ヲ譯官トシ波止場ニ至リ「レマ」
氏ト共ニ小蒸気ニ搭シ九^{カオロン}竜西ノ砲台ニ到ル此
砲台ハ高サ水面ヨリ九十九尺^{フィート}大砲三門ヲ備ヘ
得ヘシ現今ハ砲二門アリ口径七^{インチ}ト共ニ俄ニ

備エシモノト云フ故ニ又火藥庫三ヶ所アリ其
砲台モ新築ナリ
貯藏シ得ヘキ彈藥ノ多寡凡百五十發許又胸壁
ノ厚サ三十突ニシテ外方ハ尋常ノ土ヲ以テ作
リ其厚サ二十四尺内方八尺ハ石灰ト土トヲ混
合セシモノヲ以テ被覆セリ夫レヨリ九竜ノ東
ノ砲台ニ至ル此砲台ハ西ノ砲台ト相背對スル
距離凡ソ我一里弱ニシテ其構造ハ西ノ砲台ト
異ナルナシ大砲四門ヲ備フルヲ得ヘシ火藥庫
四ヶ所アリ夫レヨリ又北点ノ砲台ニ至ルヘキ
筈ナリシガ干潮ナルノ故ヲ以テ果サス然レド

モ其構造ハ前ノ二砲台ト全一ニシテ砲四門ヲ
備フルヲ得ヘシ又此北点ノ砲台ト九竜東ノ砲
台トハ海水ヲ隔テ、相對ス其距離九一英里許
ナリト云フ此三個ノ砲台ハ共ニ皆悉ク落成セ
シモノニアラス即今專ラ構造中ナリ

六日晴無記事

七日雨無記事

八日雨無記事

九日雨明日兵營一見ノコトヲ副官少佐同氏ノ

氏ニ照會セシ所直ニ明十日午前第十時同氏ノ

公署へ至ルヘキ旨回答セリ
十日午前第九時三十三分ヨリ三井物産會社々
員執行弘道ヲ譯官ニ依頼シ共ニ海岸筋(大街路)
ナル「パ」氏ノ公署ニ至リ同氏ト共ニ先ツ歩
兵營ヲ一見ス当地ニ駐在スル英兵ハ歩兵一大
隊即チハ中隊砲兵一隊ニシテ三ヶ所ノ兵營
ト數ヶ処ノ人民ノ家屋ニ此在ス其大街路ニ在
ル兵營ハ皆十三層樓ニシテ上層ト第二層ハ居
室トナシ最下層ハ專ラ物品貯蓄所事務所等ト
ナス共ニ清潔ナリ銃ハ「ヘン」リトマルチニ「銃

銃ノ方ヲ用フ然レトモヲ用ユ寢臺ハ鉄製ニ
下士ハ銃カノ方ヲ用フ
シテ中央ヨリ前方ハ進退ニ得ル如クニ製シ昼
間ハ收メテ其上ニ蒲團ヲ二折シテ載セ通路ノ
方ハ腰掛ヲ兼用ス故ニ食堂講堂ノ外ハ別ニ机
腰掛等ナシ此後方ニ棚アリテ上ニ若干ノ衣服
ト其他ノモノヲ置キ棚ノ下ニハ外套ト所要ノ
品ヲ疊ミテ緋革ヲ以テ外見能ク作り折釘ニ鈎
セリ之レ背囊ヲ用ヒサル故ナリ又食堂ハ寢室
外ノ迴廊ニシテ之レニ机ト腰掛トヲ備フ其食
器ハ徑五六寸深サ三四寸許ノ大ナル白色ノ磁

器ナリ鹽嗽所ハ水ヲ背後ノ山ヨリ引キ甚タ便
利ニ構造セリ浴室アリ炊事場アリ酒保室アリ
酒保室ハ時間ヲ定メ之レヲ開キ酒類數種ヲ販
賣ス又下士ト士官ノ為メニ特ニ遊戯場各一ヶ
所アリ此兵營ニハ歩兵三中隊屯在ス其一中隊
ハ士官五名下士十五名兵卒百八名合計百二十
八名ナリ此營ヲ出テ東ノ方ニ行ク四五町ニシ
テ少シク山手ニ一營アリ三中隊屯在ス其構造
等大同小異ニシテ他ノ二中隊ハ既ニ婚姻セシ
モノナルヲ以テ悉ク人民ノ家屋ニ屯在ス又砲

廠アリ該廠ハ相對シテニヶ所トナシ海岸ノ方
ニハ專ラ巨砲ヲ以テ最トスチレ砲彈地雷水雷
等ヲ貯フ後裝砲ハ小ナルモノ僅ニ三四門ノミ
又山手ノ方ハ事務所ト種々ノ雜具ヲ貯フ元來
該廠ハ陸海兩兵ノ需用品ヲ貯蓄スル所ナルヲ
以テ其物品ノ種類殊ニ多シ此館ヲ出テ病院ニ
至ル此病院ハ海中ニ設ベタル巨艦ヲ以テ之レ
ニ充ツ該艦ハ甲版三層ニシテ二層ハ病室ニ俱
シ上層ハ庖厨及ヒ道遙所トス現今入院スル病
兵七十六名ナリ

十一日雨記事ナシ

十二日雨記事ナシ

十三日曇午後二時ヨリ囚獄ニ至ル囚獄長ハ英人「タヌキ」氏ニシテ同氏ハ鼎介等ヲ誘導シ且ツ親シク説明ヲ為セリ其家屋ノ建築ハ兵營ヨリ却テ美麗ナリ獄舎ハ其罪ノ輕重ト人種トニ依テ區別シ其重罪者ハ輕罪者ヨリ却テ緩ニシテ一室ニ一名若クハ三名五名七名九名等ノ如ク半数ニ同居セシム之レ破牢或ハ其他ノ害ヲ預防スル為メナリト罪囚ハ支那人最モ多ク白人

種及ヒ黑人種ハ甚タ僅少ナリ又支那婦人十五六名アリ歐州婦人其看守ヲ掌リ其男女ヲシテ嚴ニ相隔絶セシム食料ハ支那人ニハ米飯ト魚類及ヒ野菜少許ヲ飯上ニ載セテ給ヒ歐人ハ麵包肉汁等ヲ與ユ共ニ罪ノ輕重ニ依テ多少ノ別アリ工業ハ支那人ハ席ヲ織リ又ハ廢物ニ屬セル網ノ四五寸許ニ裁断セルヲ手ニテ撒セリ又株欄網ヲ以テ洗濯刷ヲ作レリ甚タ工ミナリ之レ船中ニ用フル網具ノ廢物ヲ以テ作ルト云フ運動ハ日々ニ時間ヲ定メ三十分石ヲ負フテ運

動スレハ三十分ハ玉ヲ号令ニ從テ此臺ヨリ彼
ノ臺ニ移ス其間相距ル凡四五歩許ナリ食事ハ
一日二回ニシテ支那人ハ数十名縦列ニ跪坐シ
一齊ニ食セリ巡視中罪囚ノ訴ヘヲナスモノア
リ「タスキ」氏ハ之レヲ聞キ其許スヘキハ許シ事
不條理ナレハ之レヲ論ス等罪囚ヲ愛憐スル感
スルニ堪ヘタリ看守人ハ銃ヲ携ヘテ鉄柵中ニ
在リ此鉄柵ハ内ヨリ鎖シ且ツ事務所ヘ鉄條ヲ
架シ(傳信ニアラス)以テ音信ヲ通スル如クス斯
ノ如クナスハ若シ罪囚多人數相謀テ破穿セン

トスルトキ之レヲ事務所ニ報シ且逸脱スル者
アレハ柵中ヨリ銃撃スル為メナリト其用意嚴
重ナリ

十四日大雨無記事

十五日雨無記事

十六日雨無記事

十七日微雨無記事

十八日晴此日英國郵船出港ニ付東京へ第六号
報告ヲ發進ス又午後七時三十分電報ヲ以テ歸
朝ノ命アリ依テ船便次第速カニ歸朝スヘキコ

トニ決ス

十九日半晴便船ノ有無ヲ氣船會社ニ問合セシ

ニ二十五六日ニアラサレハナシト故ニ空シク

郵便船ノ来港ヲ待ツ

二十日曇香港中外新報ニ我軍艦日進号去月十

七日由厦門駛テ福州ニ往ク此船軍伏甚々備リ

氣象雄毅ナル所アルニ似タリト又其西報ノ部

ニ日本戦艦此次福州ニ往ク或ハ琉球ノ事ニ因

ル未タ知ルヘカラスト記載セリ其他兩國ニ関

スル論說一二ヲ併載ス

二十一日雨無記事

二十二日晴無記事

二十三日雨

二十四日雨不日帰朝スヘキヲ以テ本日囚獄所

長「タヌキ」氏造船所長「ギリ」氏及ヒ裨官少佐「ハ

マ」氏ヲ招待ス

二十五日曇本日佛国郵便船来港明日当港拔錨

ノ報アリ

二十六日晴午後三時半旅舎ヲ蕪シ佛國郵船「チ

」ブル号ニ搭シ同四時拔錨

二十七日微雨夕ニ至リテ大雨咫尺ヲ辨セス航
海中

二十八日晴午前十一時右舷ニ台灣島ヲ見ル

二十九日晴無記事

三十日晴午前八時三十分右舷ニ二小島ヲ見ル

又九時ニ至リ左舷ニ三小島ヲ見ル想フニ此小

島ハ琉球ノ屬島ナル可シ此日正午十二時頃大

風航海甚夕易ナラス

七月一日晴無記事

二日晴午後十時横濱港ニ投錨直ニ上陸

三日晴午後一時歸京ス

明中服中級一單

15915

